

41975

教科書文庫

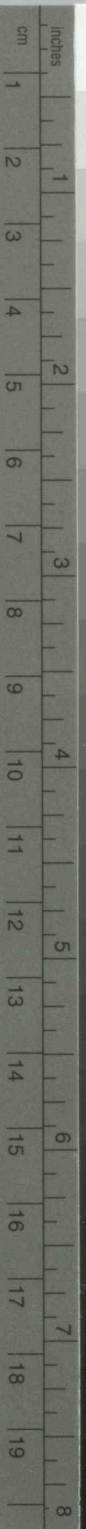
4
810
41-1937
200030
2224

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



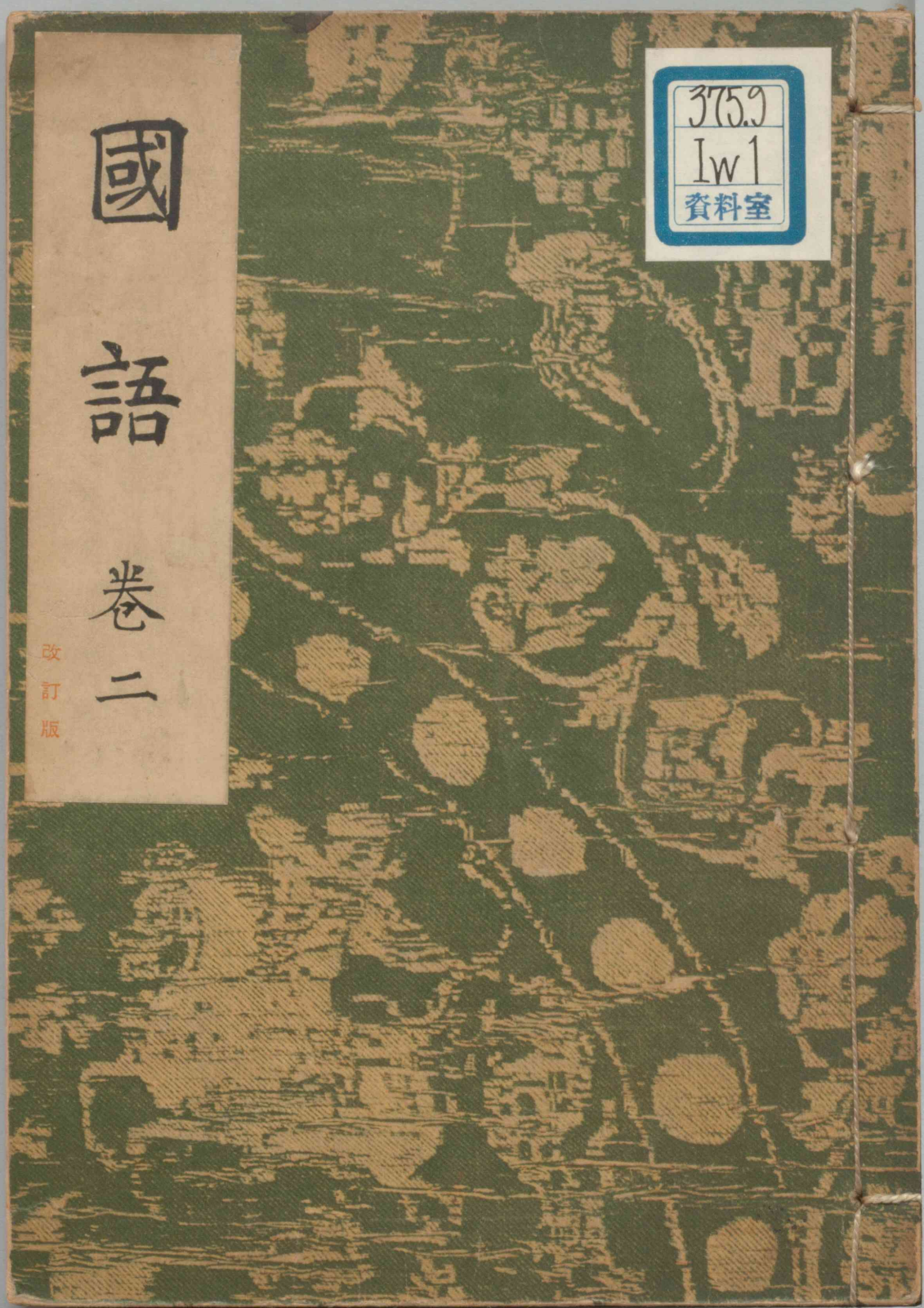
375.9
Iw1
資料室

國

語

卷二

改訂版



日一十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

國語

岩波編輯部編

改訂版

岩波書店刊

資料室

375.9
Iw1

第三十五學級三席

寺西忠成

筆樹百福平



原 高

昭和二十二年六月一日
大正十三年六月一日
中華書局發行

廣島大學圖書印

広島大学
教 30337
図 書

國語 卷二 目次

一 日本	山村暮鳥	一
二 明治神宮	溝口白羊	七
三 大海の出日	徳富蘆花	一四
四 雞の聲	伊藤左千夫	一六
五 小春の岡	長塚節	二二
六 落葉	島崎藤村	二四
七 渡り鳥	松本亦太郎	三〇

八	潮待つ間	幸田露伴	三
九	親心	柳澤淇園	三
一〇	父の物語	新井白石	七〇
一一	宮本武藏	武者小路實篤	七四
一二	武藏野日記	國木田獨步	六
一三	冬山	前田夕暮 若山秋水	三
一四	トロッコ	芥川龍之介	六
一五	吹雪	村井弦齋	二四
一六	人間エヂソン	ラスキーン 澤村寅二郎譯	二四 一七
一七	水		

一八	蜃氣樓	橘南谿	一四
一九	雪國の春	相馬御風	一五〇
二〇	櫻井驛	眞山青果	一五
二一	國歌	田邊尙雄	一七二
二二	國民のまごころ	芳賀矢一	一七九



國語 卷二

一 日本

山村暮鳥

山村暮鳥
本名土田八九
十
詩人
群馬縣の人
大正十三年歿
年四十一

日本、うつくしい國だ。
葦の葉つばの
朝露がぼたりと
おちてこぼれてひとしづく、
それがこの國となつたのだとでもいひたい

やうな日本。

大海のうへに浮いてゐる

かはいらしい日本、

うつくしい日本。

小さな國だ、

小さいけれど、

その強さは鋼鐵のやうな精神である。

おお、日本、

ぴちぴちしてゐる魚のやうな國。

勇敢な日本、

古い日本、

その霧深い中にとちこもつて

山鳥の尾のながながしい夢を見てゐたのも、

いまはもうむかしのことだ。

目をあげて、

そこに

どんな世界をお前は見たか。

日本、 日本、

お前のことをおもふと

この胸が一ぱいになる。

お前は希望にかがやいてゐる。

お前は力にみちみちてゐる。

そして眞劍だ。

だが日本よ、

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい。

お前はよるひるたえず

お前のまはりにうちよせてゐる

その浪の音をなるときいてゐるか。

寂しくないか、

おお孤獨な

遠い一つの星のやうな日本、

からりとはれた黎明の天のやうな國、

ときどきは通り雲の

さつとかかるぐらゐのことはあつても、

お前はただの一度でも

その顔に泥をぬられたことがないんだ、

そんな美しい國なんだ。

日本、

幸福な日本、

強い日本、
 わたしらの生まれたところ、
 めざまめた國、日本、
 若い國、日本、
 すこやかであれ、
 驕るな。
 日本よ、眞實であれ、
 ばかにされるな。

溝口白羊
 名は駒造
 詩人 國文學
 者

大阪市の人
 明治十四年生
 明治神宮
 現東京市澁谷
 區代々木外輪
 町に鎮座する
 官幣大社
 明治天皇及び
 昭憲皇太后を
 奉祀する
 代々木
 舊東京府豊多
 摩郡代々木町
 代々木
 現東京市澁谷
 區の内

二 明治神宮

溝口白羊

快美な色彩の反射と和らいだ感觸とをもつた秋の
 日の光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎ
 ながら、そして、何處からともなく高くにほつて來る新
 しい檜の香をかぎながら、幾度其處を通つたことであ
 らう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的
 の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて
 流れ出た。

或時は、無數の蟻の一團が大きな餌を引くやうに、六
 七丈程もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫

が汗みどろになりながら、曳々聲して森の中へ引き入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ。さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、なんとも言ひ表しやうのない懐かしさに充たされた。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて進捗して、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がとうとう竣工を告げた。かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た所には、今、清らか

な小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、其の以前、疎らな松林の中から、耕地の廣く展開してゐるのが遠望された御料地は、いつの間にもやうやう、尊い神域に化して、森嚴と幽邃とを兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、所謂流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域、眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。私は始めて此の完成した明治神宮の神苑に立つたとき、其の改つた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい「建設」

明治天皇
御諱は睦仁
第百二十二代
御在位二五二
七―二五七二
年
明治四十五年
崩御 寶算六
十一



明治天皇

の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であるとか、用材の總計が尺一萬九千本であるとか、いふやうなことが、細密な數字を擧げて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部分に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固きに置いたものであつて、明治天皇の御聖

昭憲皇太后
御諱は美子
明治天皇の皇
后
大正三年崩御
寶算六十五

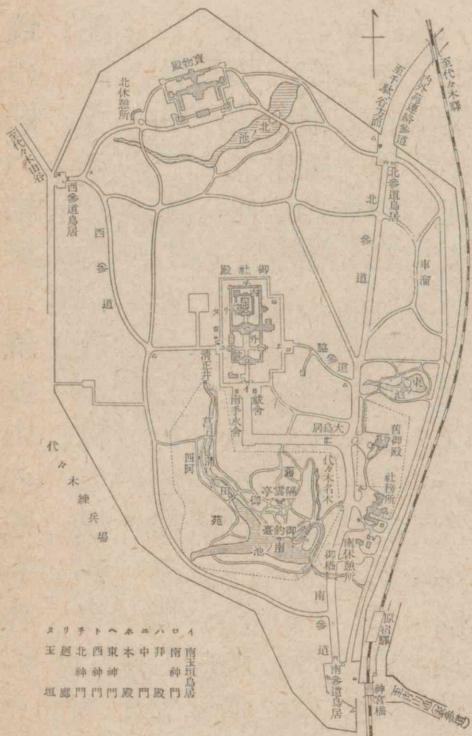


昭憲皇太后

徳と、昭憲皇太后の御懿徳と、そして此の二柱の大神の御恵に對へ奉らうとする國民の至純な感謝の心情と、此の三つが、陰に陽に工程の進捗を刺激して、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である。ことは、何人も疑ふことの出来ない事實である。嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里、二百里の遠隔地から眞心をこめて輸送して來た

無數の獻木、それらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、國民の眞心によつて完成した此の宮居に、國民崇敬の的であらせられる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が永遠に鎮まらせ給ふのである。何といふ美しい尊い事實であらう。私は、表參道を直路神宮橋畔南參道鳥居の前に進んで、遠く神域を望み見た刹那、何よりも先づ此の事を直感した。そして、一歩一歩美しい小砂利の上を神殿に近く歩を進めるに随つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

萬成
萬成山
岡山市の西北
部に在る
花崗石の産地



明治神宮境内略圖

參道の兩側には、密林が何處までも續いて、行くに随つてそれが段々濃くなる。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて御橋の所に來ると、何處からともなく、水の音が聞えて來る。岡山萬成

産の石で出來てみるといふ勾欄に凭つて下を見ると、橋下は溪流の趣を摸した景

筑波山
茨城縣筑波・
眞壁・新治三
郡の界に在る
紅於
霜葉紅於二
月花。(杜牧)

致の好い細流で、筑波山の國有林から移した自然石の配置された所に、數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織り成してゐる。此處は神苑の中で唯一の人工味を加へた所で、神苑の殆ど總べてが、繊細な技巧を排した自然的大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐるのである。

御橋を渡ると、兩側は一帯の杉竝木になつてゐて、其の左側の竝木が斷えた所に、樹齡千七百四十年を重ね、六丈餘に達したといはれる、臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては、實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとのことだ。

原宿
舊東京府豊多
摩郡千駄ヶ谷
町原宿
現東京市澁谷
區の内
千駄ヶ谷
舊千駄ヶ谷町
千駄ヶ谷
現澁谷區の内



(筆觀大山横) 殿拜と門神南

此の大鳥居のある所は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷口から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、其の道の盡きた所で右を見ると、ぱつと眼界は急に廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の

木曾御料林
木曾谷(長野
縣西筑摩郡内
の山谷)に在
る
宮内省帝室林
野局木曾支局
の管理に屬す
る

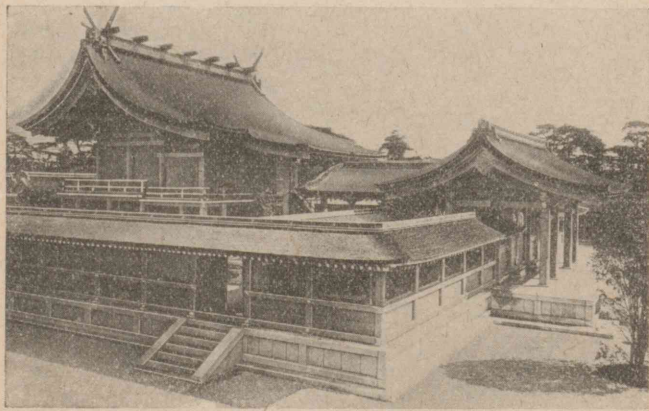
何事のお歌
西行
伊勢の皇大神
宮を詠み奉つ
たもの
異本山家集に
ある

疎林を背景にした、土佐繪のやうな社殿の檜皮葺を拜
することが出来る。

社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、其の總坪
數六百五十。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て
造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい
檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居
らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門
を通して奥は、即ち神靈のおはします内内院で、みだり
に窺ふことを許されない神聖な場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかた
じけなさに涙こぼるる

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。何といふ
明るい、快い感じを持つた社
殿だらう。今までに見た大
抵の社殿が、皆暗い周圍から
來る鈍い光の中に、靜寂な、併
し陰鬱な感じを漂はせてゐ
る中に、此の神宮ばかりは、十
分な光線の中に隠す所なく、
總べてを解放し、總べてを露
呈してゐる。しかも、決して
淺露な感じはなく、却つて一層深く大きくされた靜寂



殿 本

の中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して来て、自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り来るのを覺える。

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。一切の舊弊を排除して、國民との觸接を計らせられ、國民と親しく協力して新文明を吸収しようとして御勉め遊ばされた明治天皇の、活動的な、進取的な、闊達な御氣象に對し奉つて、其の明るい感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。

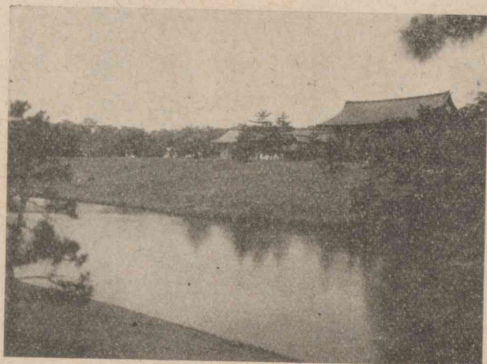
拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥に

續いて遠く望まれる便殿、それら總べてが、又譬へやうのない莊嚴美を示してゐる。

拜殿を下りて、西神門から出て行くと、約一町に互る森林帯があつて、その向うには、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生が一面に緑の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見られる。此の邊へ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帯びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いて

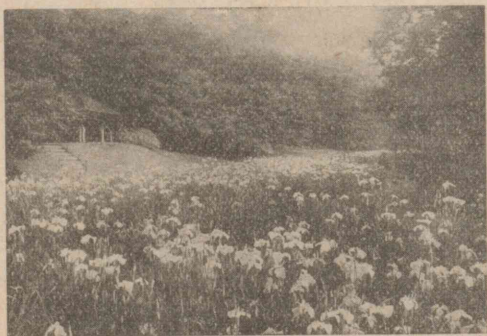
八幡製鐵所
福岡縣八幡市
に在つた官設
製鐵所
今の日本製鐵
株式會社八幡
製鐵所の前身



寶物殿
萬貫に及んだといはれてゐる。
殿 物は 後は一帯の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、其の池塘をめぐつて、楓の樹が美しく植ゑつらねられてゐる。

私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を南參道の中程に近い社務所の邊まで引返した。此のあた

りは、明治天皇、昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる代々木御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色其のまゝのもので、殊更技巧を弄しない所に、何ともいへぬ優雅な趣を帯びてゐる。此の御苑は、祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた所で、すつきりと高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちにしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、一面に



田 蒲 菖

熊笹の生ひ茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や檜の雑木林にも、到底東京近郊では見ることの出来ない野趣がある。

昭憲皇太后が特に御觀賞あらせられたといふ菖蒲田や、今上陛下が東宮時代に行啓あらせられた時に屢々御飲用遊ばしたといふ清正井の名泉、代々木の名の起原であるといふ大木の樅も、此の近くに在るのだ。

私は其の一つくを拜觀して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつて御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりは、すっかりもう深い霧に包まれて、晝でも暗いほど黒々と生ひ茂つてゐる

今上陛下
大正天皇

る樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ残つて續いて見える。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも鑄つけられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴幽邃優雅な神苑。私は今にして始めて、明治神宮鎮座の地として、代々木が選ばれたことの偶然でないのを知つた。

(明治神宮紀)

徳富蘆花
名は健次郎

小説家
熊本縣の人
昭和二年歿
年六十

銚子
千葉縣銚子市

三 大海の出自

徳富蘆花

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。
時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水
明樓にして、樓下は直ちに大東洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上猶ほの暗く、波の音の
み高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燻ぶりとる
樺色の横たはるあり。上りては濃き^{インディゴブルー}藍色の空とな
り、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を挂く。光さや
かにして、さながら東瀛を鎮するに似たり。左手に黒
くさし出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には回轉

犬吠岬
千葉縣の東端
太平洋に突出
する岬
銚子市の東南
に當る



犬吠岬の燈臺

燈ありて、陸より海にかけ、連りに白光の環を畫がきぬ。

暫くする程に、曉風冷々として
青黒き海原を掃ひ來り、夜の衣は
東より次第に剝げて、蒼白き曉の
波を蹈みて此方へくと近寄る
狀も指點すべく、磯の黒きに濤白
く打ちかゝる狀も漸く明らかに
なり來りぬ。眼を土ぐれば、黄金
の弓と見し月も何時か白銀の弓
とかはり、燻ぶりに見えし東の空も次第に澄みたる黄
色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の、腹は黒うして

脊は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへど、東の空已に曉を開きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

已にして曙光は花の發ひらくが如く、圈波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水いよよ白く、東の空ますます黄ばみ、弦月も燈臺もわれど薄れ行きて、果はありとも見えずなりぬ。此の時、日の使とも覺しき渡り鳥の一行、鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波と云ふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさゞめき、——聲なきの聲、四方に滿つ。

五分過ぎ——十分過ぎぬ。東の空、見る——金光射し來り、忽然として、猩紅の一點海端に浮かみ出でぬ。

すはや、日出でぬ、と思ふ間もなし。息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が手もて撃うぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遅く、萬斛の金たら／＼と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。

(自然と人生)

四 雞の聲

伊藤左千夫

伊藤左千夫
名は幸次郎
歌人
千葉縣の人
大正二年歿
年五十

天神川
横十間川
現東京市本所
深川兩區と城
東區との界を
流れる
豎川
城東・本所兩
區を横斷して
中川と隅田川
とを連ねる
横川
横十間川の西
に並行して本
所・深川兩區
を流れる

大雨が晴れてから二日目の午後五時頃であつた。世間は恐怖を帯びた騒を以て満たされた。平生聞えてゐる都會らしい音響は殆ど耳に入らないで、うかとしてをれば聞き取る事の出来ない、物の底深くに力強い騒を聞くやうな、人を不安に引入ねば止まないやうな、深刻な騒がそこら一帯の空氣を振蕩して起つた。天神川も溢れ、豎川も溢れ、横川も溢れ出したのである。平和は根柢から破れて戦闘が開始されたのである。最早、恐怖も遲疑も無い。進むべき所に進む外、何

を顧みる餘地も無くなつた。家族には近い知人の二階屋に避難すべきを命じ置き、自分は若い者三人を叱して乳牛の避難にかゝつた。豫て此處と見定めて置いた、高架鐵道の線路に沿うた高地に向かつて牛を牽き出す手筈である。水深はまだ腰に達しない位であるから、敢へて困難といふほどではない。

先づ、黒白斑の牛と赤牛との二頭を牽き出す。無心を彼等も何か感ずる所があると見え、残る牛も出る牛も、一齊に聲を限りと叫び出した。其の騒々しさは、又自ら牽手の心を興奮させる。自分は二頭の牝牛を牽いて門を出た。腹部まで水に浸されて牽き出された

牛は、どうされるかと思ふのであらう、右往左往に狂ひ廻る。固より溝も道路も判らぬので、忽ち一頭は溝に落ちて益、狂ひ出す。一頭はひた走りに先に進む。自分分は二頭の手綱を執つて、殆ど制馭の道を失つた。さうして自分も牛に牽かれて溝にはまり、水を全身に浴びた。若い者共も二頭、三頭と次々に牽き出して来る。人畜をあげて避難する場合に臨んでも、猶濡れるのを恐れてをつた卑怯者も、一度溝にはまつて全身水に漬かつては、戦士が傷ついて血を見たにも等しいものか、猛然たる勇氣が四肢の節々に充滿して、二頭の牛を兩腕の下に引据ゑ、奔流を蹴破つて目的地に進んだ。

四ツ目
本所區江東橋
附近の稱
太平町
同區太平町
江東橋の北方
に在る

かくの如くすること二回・三回、數時間の後、全く牛の避難を終へ、翌日一日分の飼料をも用意し得た。

水層は愈、高く、四ツ目から太平町に至る十五間幅の道路は、深さ五尺に近く、濁流奔放、舟を以て渡るも困難を感ずる位である。高架線の上に立つて、逃げ捨てた我が家を顧みれば、水の上に屋根ばかりを見得るのであつた。

日は暮れようとし、空はまた雨模様になつた。四方に聞える水の音は、今は壯快でさへある。自分はあたりを眺めながら、何とはなしに天神川の鐵橋を渡つた。渦高に水を盛り上げてゐる天神川は、盛に濁水を兩岸

龜戸
舊東京府南葛
飾郡龜戸町
現東京市城東
區龜戸町

に奔溢させてゐる。薄暗く曇つた夕暮の底に、濁水の溢れ落ちる白泡が、夢のやうにぼんやり見渡される。遠く龜戸^{かみと}方面を見渡すと、黒い水が漫々として、大湖のやうである。四方に浮いてゐる家棟は、多くは軒以上を水に没してゐる。なる程洪水だと嗟歎せざるを得なかつた。

龜戸には同業者が多い。未だ避難し得ない牛も多いと見え、そちこちに牛の叫び聲がしてゐる。暗い水の上を傳はつて、長く尻聲を引く。聞く耳のせみか、たまらなく厭な聲だ。稀に散在して見える三つ四つの燈火が殆ど水にくつついて、水平線の上に浮いてゐる

かの如く、寂しい光を漏らしてゐる。

水量が盛で人間の騒も壓せられてゐるのか、割合に世間は静かだ。まだ宵の口と思ふのに、水の音と牛の鳴く聲の外には、餘り人間の騒は聞えない。寥々として寒さうな水が漲つてゐるのみである。鐵橋を引返してくると、牛の聲は幽かになつた。壯快な水の音だが、殆ど夜を支配して鳴つてゐる。

家族の避難した二階は、七疊程の一室であつた。其の家の人々の外に、他からも四五人避難して來てゐたので、七疊の室に二十餘人、其の間に幼いものを寝かせてしまへば、他の人々は唯膝と膝を突合はせて坐つて

ある外はないのである。

將來の事はまだ考へる餘裕も無い。煩悶苦惱、決せんとして決し得なかつた問題が解決してしまつた自分は、此の數日來に無い、心安い熟睡を遂げた。頭を曲げ、手足を縮め、海老のやうな恰好で困臥しながら、氣安く、心地爽やかに眠り得た。數日來の苦惱は跡形も無く消え去つて、體内に新たな活動力を得たやうに思はれたのである。

實際の狀況はと見れば、僅かに人畜の生命を保ち得たのに過ぎないのであるが、敵の襲撃が深刻を極めてゐるから、自分の反抗心も極度に興奮して、何處までも

奮闘せねばならぬ決心が自然に強固となり、大災害を哀歎してゐる暇がないのであらう。人間も無事だ、牛も無事だ、よし、といったやうな、爽快な氣分で朝まで熟睡した。

「家の鶏とらが鳴く」といふ子供の聲が耳に入つて眼を覺した。起つて窓外を見れば、濁水を一ぱいに湛へた我が家のあたりに、夜はほのくと明けそめてゐた。そして忘れられて取殘された鶏は、主なき水漬き屋に、常に變らぬ長閑な聲を長く引いて時を告げるのであつた。

(左千夫全集)

長塚節

歌人 小説家

茨城縣の人

大正四年歿

年三十七

鬼怒川

栃木縣北部の

那須火山帯に

發源し同縣を

流れて茨城縣

で利根川に入

五 小春の岡

長塚節

小春の日光は岡の畑いつばいにさしてゐる。岡は、田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれ、一方は村から村へ通ふ街道へ傾いてゐる。

田は岡に添うて狭く連なつてゐる。田圃を越して、竹藪交りの村の林が田に添うて延びてゐる。竹藪の間から草家がぼつくと見えかくれする。帚草を中途から伐り離れたやうに枝をひろげた櫟の木が、そこにもこゝにもすくくと突つたつてゐる。

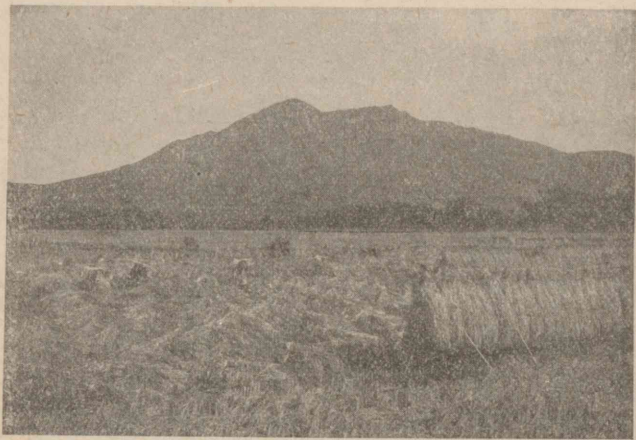
田にはもう掛け稻は稀で、竹の「をだ」だけがまだ外さ

れずに立つてゐる。「をだ」には、黄昏に鳴でも來てとまゐる位のことだらう。見るから淋しげである。

鬼怒川の土手には篠がいつばいに繁つてゐるので、近くの水は其の陰に隠れて見えぬ。上る白帆は篠の尖に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて水がしらくと見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから、篠の尖を離れて高瀬舟の全形が見える頃は、白帆は遙かに小さく縮まつてゐる。土手の篠の上には、對岸の松林が連なつて見える。更に其の上には、筑波山が一脚を張り、他の一脚を上流まで延ばして聳えてゐる。小春の筑波山は、常磐木の部分を除いて

筑波山
茨城縣筑波・
眞壁・新治三
郡の界に在る

觀測所
中央氣象臺附
屬筑波山測候
所



筑波山

は赭く焦げたやうである。其の赭い頂上に、點を打つたやうに觀測所の建物がぼつちりと白く見える。やゝ不透明な空氣は、針の尖でつづくやうに、其の白い一點を際立つて眼に映じさせる。櫟林は、此の狭く連なつてゐる田と鬼怒川との間をつないで横につゞいてゐる。田も遙かさきは櫟林に隠れ、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木

兩毛
上野國（現群馬縣）と下野國（現栃木縣）

にびつしりと赭い葉がくつついてゐる。岡の畑は向うへいくらか傾斜してゐるので、中央に立つて見ると、櫟林は半ば隠れて、低い土手のやうに連なつて見える。林の上には、雪を戴いた兩毛の山々がぼんやりと白い。こんな周圍の中に、岡の畑は朗かに晴れてゐる。土は乾き切つてゐる。既に二三寸に延びた麥は、岡いつばいに薄く緑青を塗つたやうである。そこにもこゝにも、百姓が小さく動いてゐる。麥畑をうなつてゐるものもあるが、大抵は芋掘りの人々である。四五人の手で芋を掘つてゐる。畑の縁には馬が茶の木に繋いであつて、俵が轉がつてゐる。此の俵

があれば、遠くからでも芋掘りの人々であることがわかる。馬は退屈まぎれに、茶の木をむしることがある。其の時一人が驅けて来て、轡をがちんと一つ極めつけて叱りとばすと、またおとなしくなつて、ばさりくと尾を動かしてゐる。

みんなの手もとは忙しい。しかし、岡はたゞ長閑である。日は稍傾いた。忽然として筑波山の絶頂から眩しい光がきらりとさして来た。毎日同一の時刻に、此の光は此の岡へ強くさしかけて来るのである。或者は筑波山で火をもやすのだらうなどといつてゐる。しかしそれは観測所のガラス窓が日光を反射す

るのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間にとゞこれだけである。ガラス窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘りの人々は、勿論此の光は知らなかつた。兩毛の山々のぼんやりした日は西風が吹かないので、随つて暖い。暖い日は芋掘りには此の上もない日和である。

街道へおり口の畑でも、二人して芋を掘つてゐる。隣の桑畑は葉が大方落ちて、あたりへもそれが散らばつてゐる。青いよわ／＼した小麥が生え出してゐる。小麥は芋の間に二畦づつ作つてある。芋の莖はべつたりと茹でたやうである。女は、芋の莖を菜刀でもと

から切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から男が、鍬の先で芋の株を掘り起す。ぴかぴかと光る鍬の先を、ざくつと芋の株へ斜に突きたてて、ぐつと鍬を持ちあげると、大きな土の塊がふはりと浮きあがる。鍬をそつと抜いて先の株へ移る。小麦に障らぬやうに極めて丁寧に掘つては、先へくつと行く。女は莖を切り終ると、後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を両手で二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。こまかな土がほぐれて、こぶつた子芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを両手の平でぶりくつとはがして、やがて俵

を立てて入れる。さうして穴の土を手の先でならして、次の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた圓い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其の土をあとからあとからとこまかに乾かして行く。

短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に、眞逆様に落ちかゝる。横にさす光は麥の葉をかすつて、赭い櫟の林が一しきり輝く。

畑の縁の茶の木の花は白々と光を帯びてゐる。筑波山は見るく濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稲を刈る頃から、夕日のさし加減で、筑波山は形容し難

い美しい紫を染め出す。百姓に聞いてみれば、嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて残暈がなほ明らかを數十分間は、彼等の仕事が最も捗どる時である。夕餉の支度をするために、女等は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。

女等が去つてしまふと、百姓の手もとがやうやく薄暗くなる。頬白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓はそんなことには頓著なしに、せつせと芋を俵につめる。

村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで届かうとしてゐる。其の時、百姓は黄昏の中を、相前後して歸つて来る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から畑から、次第に天地の間を掩うた。

(長塚節全集)

六 落 葉

島 崎 藤 村

島崎藤村
名は春樹
詩人 小説家
長野縣の人
明治五年生

武藏野
東京府・埼玉
縣附近一帯の
平野
この山の上
長野縣北佐久
郡小諸町

君
音羽樹

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武藏野へ来る冬、淺々とした感じの好い都會の霜さういふものを見慣れてゐる君に、この山の上の霜をお目に掛けたい。この桑畠に三度か四度もあの霜が來て見給へ、桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうになり、畠の土はぼろ／＼に爛れてしまふ。それはまことに見ても恐しい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔らかい。降り積る雪はむしろ平和な

感じを抱かせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜のために焼け損はれたり、縮れたり、はしないが、朝日があたつて來て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めてゐた位だ。そして、その朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起き出して見ると、一面に霜が來てゐて、桑畠も野菜畠も

天長節
明治天皇の天
長節
十一月三日

家々の屋根もみな白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れるばかりであつた。すこしも風は無い。それでゐて、一葉二葉づつ静かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀も、いつもよりは高く勇ましさうに聞えた。

空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は、勝手元の焚火に凍えた兩手をかざしたくなつた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも恐しい冬の近よつて來ることを感じた。

この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、殆ど五箇月の冬を過さねばならぬ。その長い冬籠り

の用意をせねばならぬ。

木枯が吹いて來た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて來るやうな音に驚かされて目が覺めた。空を通る風の音だ。時々それが静まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向の障子にはばらくと木の葉のあたる音がして、その間には千曲川の河音も、平素ふだんからみるとずつと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞ひこん

千曲川
長野縣南佐久
郡に發源して
北流し犀川と
合して新潟縣
に入り信濃川
となる

で来る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流れのところ立柳などは、烈風に吹かれて髪を振るふやうに見えた。枯々とした桑畠に茶褐色に残つた霜葉なども、左右に吹き靡いてゐた。

その日、私は学校の往きと還りとに停車場前の通を横ぎつて、眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて兩手を袖に隠した女だのの行き過ぎるのに遇つた。往き來の人々は、いづれも鼻汁をすすつたり、目縁を紅くしたり、あるひは涙を流したりして、顔色は白つぽく、頬・耳・鼻の先だけは赤くなつて、身を縮め、頭をかゝめて、寒さうに歩いてゐた。風を背後うしろに

した人は飛ぶやうで、風に向かつて行く人は、力を出して物を押すやうに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹きまくる光景は、凄じく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹も動搖し、柳・竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に残つたのは吹き落された。梅・李・櫻・櫻・銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこゝに聚つた落葉が、風に吹かれては舞ひ上つた。急に山々の景色は淋しく、明るくなつた。

(千曲川のスケッチ)

松本亦太郎

心理學者

文學博士

元東京帝國大

學教授

帝國學士院會

員

群馬縣の人

慶應元年(二

五二五)生

サウスケンシン

トン

ロンドン市ケ

ンシントン區

の内

七 渡り鳥

松本亦太郎

梅が枝に飛ぶ黄鳥や、池水の面に眠る鴨の姿は、いかにも閑雅で、泰平の瑞相として人に愛でられてゐるが、鳥の無邪氣さ愛らしさは、其の家族生活に最もよくあらはれる。サウスケンシントンの博物館には、殆どあらゆる鳥の巢が蒐集されてあつて、其の巢の周圍には、剥製の鳥を配置し、親鳥が其の雛や卵を愛育保護する天然其のままの状態を寫してゐるが、鳥の表情といひ、周圍の風色といひ、いかにも眞に迫つてゐて、これを見る人間は、禽鳥の一家親子の情合がいかにも濃であり、い

かに平和であるかを想像し、感歎せざるを得ない。

併し、鳥類が右のやうな喜樂・平和の中に棲息するのは、其の生涯の或短時期に過ぎない。他の方面からみれば、それは實に一大奮闘の生涯であるといはねばならぬ。鳥は自己の生存及び種族蕃殖のために、他の鳥と争ひ、或は鳥以外の諸動物と戦ふのであるが、鳥類の奮闘の最も激烈を極めるのは、殆ど不可抗の天然力に頷頷して、其の意志を貫ぬかうと努力する時である。かゝる場合に於ける奮闘は、實に莊嚴なものである。

天然力に抵抗して禽鳥が大奮闘をなす適例は、これを其の去來現象に於て見ることが出来る。此の去來

黄金鷗
むなぐるの一
種
鷗目千鳥科の
鳥
ニューファウン
ドランド
北米大陸の北
東セントロー
レンス湾口の
大島



群飛のぎし

現象は、日本では春と秋とに最も著しく、北方から南方へ向かふものと、南方から北方へ向かふものとがある。即ち自己の郷土に向かつて歸り來るものと、自己の郷土から去つて遠い遠い所へ飛び行くものとがある。

禽鳥去來の距離について、西洋の學者は種々研究を試みてゐる。黄金鷗はニューファウンドランド附

ハイチ島
西印度諸島の
大アンチル列
島に屬する

石返し
きやうぢよし
ぎの一種
鷗目千鳥科の
鳥
グリーンランド
北米大陸の北
東岸に在る世
界第一の大島

バルチック海
ヨーロッパ大
陸とスカンヂ
ナヴィヤ半島
とで圍まれた
海

近に生まれ、中央亞米利加のハイチ島あたりまで移住するのであるが、其の距離は千七百哩に達する。俗に「石返し」といふ鷗の郷土はグリーンランド附近であるが、これが冬になると、濠洲或は南米に移住するのであるから、其の旅程は約七千哩に達するのである。此の他、南阿及び濠洲に居る鳥で、春になると北氷洋に移る鳥がある。即ち、其の旅程は九千哩以上である。あの小さい雙翼の力を頼みに、地球の直徑よりも遠い距離を飛翔する勇氣と努力とは、人間の想像以上である。

禽鳥去來の道筋は、最短距離を取るのではなくて、多くは至つて迂回してゐる。例へば、バルチック海濱に

アルプス山、
 ヨーロッパの
 西南部に横た
 はる大山脈
 ライン河
 ドイツ西部を
 流れる
 ローン河
 フランス東部
 を流れる
 シンリー
 イタリヤの南
 端地中海の大
 島

棲息する鶴は阿弗利加に去來するのであるが、最短距離からいへば、アルプス山を越え、伊太利の東海岸を経て阿弗利加に入るべきであるのに、實際はライン河に沿うて其の源まで溯り、それからローン河に随つて海岸に出で、伊太利及びシンリーの西岸を過ぎつて阿弗利加に入るのである。此の徑路は年々殆ど不變である。旅行には、休息の場所や食餌を得る場所が必要であるのみならず、氣候の關係もあるから、やたら道の取るといふ譯にはゆかぬ。もし誤つて去來の公道から迷ひはづれる時は、種々な障害に遭つて、遂に其の目的地に達することが出來ずに死ぬのである。故に、鳥

類にとつては、正當な去來の道筋を知ることが、死活の問題になるのである。

鳥類はいかにして其の去來の道筋を知るに至るのであるか。本能によつてこれを知るのであるといつては、説明が餘り簡單に過ぎる。これも人間がまだ十分に説明することの出來ない事實の一つである。多くの場合に於ては、年長の最強の鳥が前に飛んで移住の一群を導いて行くのであるが、幼稚の鳥はこれに随行する力が足りないで、一行に後れ、路を失ふものも少なくない。時としては、母鳥が迷子になつた幼鳥を探しに戻つて、遂に自ら道を失つて死ぬこともある。暴風

に逢うて一群四散する時は、年長の雄鳥でも往々道を失ふのである。移住のはじまる季節に於ては、幼鳥が一種の旅行熱に浮かされて、親鳥の出發を待つことが出來ず、經驗もないのに無鐵砲に飛び出して、遂に正當の道筋がわからないで、途中に迷つて死ぬこともある。かういふわけで、群をなして去來することは、禽鳥のために極めて必要な事なのである。

一體、飛ぶといふことは随分難儀な動作である。禽鳥が翼をもつて空氣をうつて進んで行くのは、我々が乾燥した細かい砂の上を歩くよりも、もつと困難である。翼をもつて空氣をうつ毎に、空氣は翼の下からに



(ぎしばお) 群大の鳥り渡

げてしまふ。それ故に、空氣を翼に抵抗させ、其の力によつて身體を前進させようとするには、翼の運動を極めて迅速にしなければならぬ。其の結果、飛行は非常な疲勞を生ずるのである。尤も、翼を動かすために用ゐられる胸部の筋肉は、鳥類では頗る發達してゐて、此の筋肉一對の重量は、身體全重量の六分の一に當り、他の動物には、とても此のやうな發達は

見られない。それでも、飛行の速なものと、飛行距離の遠いものとのために、やはり甚だしい疲労を生ずる。倫敦から飛び出した鳩が、大西洋を渡り、北米合衆國に達した例があるが、途中で愈、疲労に堪へられなくなると、水面に羽翼をひろげて浮かび休むといふことである。又、遠く陸地を離れた渺茫たる海上で、幼い鳥が非常に疲労して、もうとても飛ぶことが出来ぬやうになつた時は、往々羽翼の強い親鳥が、其の背に此の幼い鳥を負うて、危急を救ふこともある。

鳥類が其の旅行中に最も辛苦するのは、暴風や大雪や濃霧などに遭つた時である。鶉の如きは、海上で疾

コーカサス
コーカサス山脈
アジヤの西部
コーカサス地方を横斷する

風に遭ふと、これに抵抗して前進を続け、愈、力が盡きると、氣を失つて水中に墜ちるのである。コーカサスの山上やアルプスの氷河の上に、時々たくさんの移住鳥の死體が発見されるのも、此のやうな天然の暴力に襲はれた結果である。併し、鳥の努力は随分激しいもので、鶉なども、もし幸に海を越えて陸地に達することが出来ても、悠々休息するなどといふことはない。疲労の餘り、已むを得ず數日間は全く翼を收めることもあるが、それでも、やはり歩行によつて、絶えず前進を続けるのである。

(渡り鳥日記)

幸田露伴
名は成行
小説家
文學博士
帝國學士院會
員
東京市の人
慶應三年（二
五二七）生

八 潮待つ間

幸田露伴

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流れに逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて、遠淺の海のことごとく干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の煎らるゝものなり。

嘗て此の事を云ひ出でて、然る折にも何とか爲すべき手段ありや」と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人打笑ひて、「何時にても纜を解かんとすれば、何時にても水あるところに舟を繋ぐべし。我等は、繋ぐ

時に解くことを思ひて繋ぎ、解く時に繋ぐことを思ひて解く。素人は、繋ぐ時は解くことを思はず、解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒らに心を干潟にあせるやうのこともあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき。たゞ少しは早くとも、心長閑に食事など濟ませて、さて、やがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟の中を取りかたづけ、猶それにて、も時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、待たぬよ

りは賢きわざなり。何時か一度は爲さでかなはぬことを爲しつゝ、待たば必ず來べき潮を待つに、大抵其の事は爲し果つるにも至らで、潮ははやたちまちにして來るものなり。何時か一度爲さでかなはぬことは、小さき舟の中につきても、いと多きものなれば、潮待つ間に爲すべきことのなきといふはなし。潮待つ間に爲すべきことあるを見出して之を爲せば、たゞ時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心のあせらるゝことなどあるべくもなし」と云ひけり。

おもしろき言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

(露伴全集)

柳澤淇園
名は里恭

大和國(奈良縣)郡山の藩主柳澤吉保の重臣
文人
寶曆八年(二四一八)歿
年五十三

九親心

柳澤淇園

予が閑窓のもとに、こつくと聞ゆる音、終日やまずいかなるものひゞきにやと、窓を押ししてこれを窺ふに、老いさらばひし翁の眼鏡をかけて、筵の上に石白の目を切りてあたり。

予、翁に問ふ、石白の目を切る事、その數、日々に幾ばくぞ。翁答へていふ、切る日もあり、切らざる日もあり。といふ。又問ふ、老翁齡いくばくぞや。答へて、今年七十一なり。また問ふ、子孫ありや。答へていふ、娘ありはやく壻をむかへて、孫三人あり。予いはく、已に娘あ

り壻あらば、老翁かゝる業はせずともありなん。」翁の
いふ、家に六人のすぎはひするに、壻一人の働にして、他
に資くるの輩なし。われ曰の目を切りたりとも、活計
を補ふべきの資力に足らずといへども、欠伸のみに徒
らに光陰を送らんよりは、せめては鼻紙の料をもたす
けばやと、かゝるあぶなき業をもしつる」といひて笑ひ
ぬ。

人の親の子をおもふめぐみ、高きも賤しきも異なる
ことなきいとありがたきものとは思ひぬ。

江戸下谷高岸寺といふに、いつの頃にか、弟子の僧二

江戸下谷
ほゞ現東京市
下谷區の地

人ありけるが、一人は身持律義にして、常々寺の爲とも
なるべきことのみに心をつくせど、一人の僧は戒行を
もたもたで、大酒を好み、いさかひなどして、よろづ私多
かりしが、ある時、什物を取り出して賣るを、一人の僧見
て、諫を加へけれども聞き入れざりければ、この由を住
持につげ、かの僧追ひ出し給はずば、寺の爲にもなるべ
からずといふに、住持は、「先づ諭し見るべし」とて、嚴し
く戒めたるまゝにて捨て置きぬ。

又ある時、佛具を取り出して賣りたるを聞きて、一人
の僧又住持が許に行きて、「悪僧、この度は佛具を盗み出
して賣りたり。われら諫めたりとて更に用ふる所も

なく、住持も捨て置き給へばぜひに及ばず。われはゆくゆく禍の寺に及びて、身にもかゝらんことをおそれおもへり。もし彼を追ひ出し給はずば、われに暇を賜はるべし」といふに、住持涙をうかべ、さあらば願のまゝにその方に暇をつかはすべし。悪僧は今しばしわが傍らに置いて、おひ／＼諭すべき」といふに、この僧大いに住持をうらみ、われら暇を乞はば、悪僧を追ひ出し給はんとおもふものから、それをかへりて罪なきわれらに暇賜はること、近ごろ依怙の心にあらずや」といへば、住持こたへて、「さにあらず。御身は今わが寺を出でたりとも、いづこへ行きて、もはや僧一人の勤はなるもの

なり。悪僧は今わが傍らを離れなば、忽ち捕はれて罪人とならんもはかり難し。さすれば、わが徳もすたれて、一人の弟子を失ふなり。ゆゑに今暫しは傍らに置きて、彼が命をも延ばし、且は厳しく教誡をもせば、善心に立返ることもあるべし。それをたのしみにわが傍らをはなつ事をせざるなり」といへば、この由を聞きて、悪僧も師の高恩に感じ、やがて善心にひるがへりしとぞ。

(雲萍雜誌)

雲萍雜誌
四卷
隨筆
天保十四年
(二五〇三)刊

新井白石
名は君美
徳川幕府の儒

官

將軍家宣・家

繼の輔佐

江戸の人

享保十年（二

三八五）歿

年六十九

父

新井正濟

上總國（千葉

縣）久留里藩

士

天和二年（二

三四二）歿

年八十二

戸部
久留里藩主土

屋利直

一〇 父の物語

新井白石

我が父致仕の後事にふれてのたまひたりしには、蘆澤といひしものは、をさなき時に父におくれしを、その父の遺領賜うて、近くめしつかはれしに、それが二十歳ばかりに及びしころに、我を召す事ありて参りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。その氣色、常にかはりぬと思ひしに、近くまゐれとありしかば、腰刀をとりて参らんとせしに、そのまゝにて参れとありしによりて、近く参りしに、たゞ今蘆澤を召し出して、手づから誅すべし。それにさぶらふべしとのたま

ひ出したり。

いらへ申す事もなくてありしに、やゝありて、いらへ



新井白石

申す事もなきは、思ふ所やあると仰せられしほどに、さん候、彼がつねづね申し候ひしは、いとけなき時に父におくれし身の、莫大の主恩によりてかくまで成長しぬ。この恩に報いまゐらせんこと、世のつねの人々の如くしては叶ふべからずと申す。天性不敵なるもの、し

かも年なほわかしくして、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し、わか候時に、彼等がごとくなるものにあらずしては、年だけ候ひし後に、ものの用にはたたぬもの多く候か。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは、恐れ思ふ所に候と申す。

またのたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくしてさぶらふほどに、やゝありて、面に蚊の集りぬるに、「逐ふべし」とのたまひしほどに、顔を動かさなければ、血に飽きて、胡頹子こたいの如くになりし蚊の、六つ七つはらくと地に墜ちしを、懐の紙をとり出して、つゝみて袖にし

てさぶらふ。また、やゝありて、「罷り歸りて休み候へ」とのたまひしかば退出す。

彼の男は常に酒をこのみて、酔ひみだれぬる事どもありしかば、關といひし人の、それにしたしかりしを、かたらひて、二人してまづ酒を断たしめて、常に諫めし事どもおこたらず。かくて年月経しのちに、つひに父の職をも仰せ蒙りたりき。

(折たく柴の記)

折たく柴の記
三卷
自叙傳
享保元年(二
三七六)成

武者小路實篤
 小説家
 東京市の人
 明治十八年生
 宮本武藏
 名は政名
 號は二天
 武藝者
 畫家
 二天流（圓明
 流）劍術の祖
 播磨國（兵庫
 縣）の人
 正保二年（一
 三〇五）歿
 年六十二
 慶長十七年
 二二七二年
 後水尾天皇の
 御代

一一 宮本武藏

武者小路實篤

慶長十七年四月十三日、宮本武藏はいつもとちがつて、日が高くなるまで起きて來なかつた。宿の主人の、問屋の小林太郎左衛門は氣が氣でなかつた。太郎左衛門自身、今日はいつてもより早く起きた。實は昨夜一晚、彼は眠れなかつた。そして、外がうす明るくなると同時に飛び起きたのだつた。彼は、武藏も今日は早く起きるだらうと思つてゐた。所が武藏は、昨晚もよく寐たらしいが、今日も朝になつても起きて來なかつた。

辰の刻
 今の午前八時
 頃

巳の刻
 今の午前十時
 頃

試合の時刻は次第に近づいてくるが、武藏の室からは少しの音も聞えない。不氣味な位だ。太郎左衛門はそつと武藏の室に忍びよつて、一寸障子をあけて見たが、武藏はよく寐てゐるらしかつた。約束の辰の刻になつても起きる氣配は見えなかつた。時はどん／＼過ぎてゆく。巳の刻になつても、まだ起きようとしなない。催促の使はまたやつて來た。武藏はやつと起きたらしかつた。まもなく、六尺豊かな武藏は、その姿をあらはした。齡は二十九歳だつた。今までに試合をしたことは何度か知れない。その度に相手をうちまかした。しかし、今度の相手は天下に

巖流
佐々木巖流
通稱小次郎
武藝者
巖流劍術の祖
慶長十七年歿

敵がないといはれてゐる巖流だ。この男も、勝負して未だ嘗て負けたことのない男だ。今までのうちで、恐らく最も手ごはい相手であらう。だが、武藏は勝利を信じてゐるやうに落ちついてゐる。彼は口を噤み、朝食をした。太郎左衛門は、武藏がいつもと同じ食欲のあるのに驚いた。

食事がすむと、武藏は太郎左衛門に、

「權の不用なものがあつたら一つ下さい。」

といつた。

太郎左衛門は、何に使ふのかとも考へずに、權を一つもつて來させた。武藏はそれを受取ると、刀を抜いて

無造作に切つた。

慣れきつてゐると見えて、見るまに、巖丈な一本の木刀が出來た。武藏はそれを二、三度振つてみた。

「それではそろ／＼出かけるといたしませう。」

さういつた。そして船頭一人をつれ、絹の袷を着、帯に手拭をはさみ、その上に綿入を引つけて、木刀と大小を持つて舟に乗つた。

「靜かに漕いでくれ。」

武藏はさういつて、舟が動き出すと、懷中から白紙をとり出し、ゆつくりとそれを繕り、綿入をぬぎ、それを纏にした。そして舟の上に横になつて、綿入をかぶつた。

船島
下關海峡に在
る小島
現下關市彦島
に屬する

備前長光
鎌倉時代中期
の刀工
光忠の子
長船一派の名
匠

彼は浪にゆられながら、いゝ氣持に居眠りしてゐるやうに見えた。

舟は靜かに、船島に進んでゆく。武藏はまるで勝負のことは忘れてゐるやうに見えた。

それに反して、巖流の方は氣の毒だつた。猩々緋の袖無羽織に染皮の裁附をつけ、草鞋を穿き、いかにも美しく用意が出来、物干竿と名づけられてゐる備前長光の三尺一寸の太刀を横たへ、時刻より早めに船島に渡つて、武藏が來るのを、今か、今かと緊張して待つてゐた。そして、舟が見える度に、緊張したりがっかりしたりしてゐた。腹も立つて來たが、それも立ちすぎて、少しぼ

んやりして來た。武藏の方は落ちつきはらつてゐるのに、小次郎の方は、今の時でいふと四時間、緊張しつゝけてゐた。

武藏の思ふ壺に小次郎は落ちこんでしまつた。その時、武藏の舟は悠々と船島に近づいて來たのだ。

その舟には、一人の船頭の姿が見えるだけだ。小次郎はこの不思議な小舟を見てゐた。彼は、この舟に武藏がねてゐるとは思はなかつたのだ。所が、舟がいよいよ岸に近づくと、その舟の内から、むくつと起き上る一人の男があつた。袴をきたまゝ、木刀をもつて、短刀を腰にさして、その男は、舟がまだ濱へつき切らない内

に、波の来る處に跳びおりた。そして、手拭をとつて一重の鉢巻をして、前頭でそれを結んだ。

「武藏だ。」

小次郎はさう思つた。

彼も普通の男ではなかつた。さう思ふと同時に、機先を制することを忘れなかつた。

武藏を迎へて勢よく進んで行つた。

「我は最前より待つてゐた。何とて後れたのか、氣でも臆したのか。卑怯者！」

武藏はそれには答へず、小次郎の方に進みよつた。

小次郎は猶豫せず太刀を抜いた。そして、その刀の

鞘を水中に投げ捨てた。

それを見ると、武藏は大きな聲を出して笑つて、怒鳴つた。

「小次郎、汝のまけだぞ。」

「なぜだ。」

「勝つものなら、鞘が入用であらう。」

小次郎はそれに答へず、いきなり、武藏の眉間を望んで打ちおろした。その太刀の鋭さ。前頭に結んであつた結び目に當つて、鉢巻の手拭は切られ、濱に落ちた。だが、武藏はそれをよけようとはしなかつた。よける必要はなかつたのだ。その瞬間に、武藏の方は既に

木刀で相手の頭を打つてゐたのだ。小次郎の方が倒れたのだ。

眞劔勝負でなかつたら、どんな名人が見ても相打と見えたであらう。だが眞劔だから、一方はぶつ倒れ、一方はかすり傷さへ受けずにすんだ。しかし、勝負はこれできまつたわけではなかつた。ぶつ倒れた小次郎はまだ死んではゐなかつた。

武藏は打倒れた小次郎を注意深く見てゐた。そして、木刀でもう一度小次郎を打たうとした時、倒れてゐた小次郎は、倒れたまゝ、刀で横に切りつけた。今度も武藏の袷の膝の上の處を三寸許り切つたが、肉にはと

どかなかつた。

この時も、武藏は既に木刀で小次郎を打つてゐた。やがて、武藏は檢使の方を向いて遠くから黙禮し、すばやく舟に戻り、そのまゝ舟を急がせて歸つていつた。

武藏は下關に立ちよつたが、そのまゝ姿をあらはさなかつた。

それから何年かたつた。

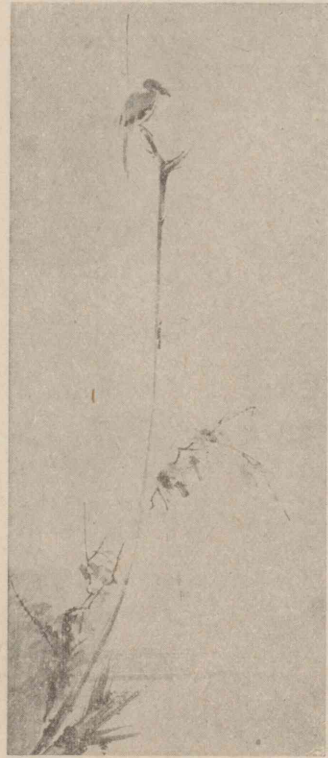
武藏は今、細川忠利にたのまれた達磨をかいてゐる。かきかけてはやめ、かきかけてはやめた。どうも思ふやうにかけない。

下關
現下關市

細川忠利
忠興の子
肥後國(熊本
縣)熊本藩主
寛永十八年
(一三〇一)
年五十六 歿

とうとう思ひ切つてかくのをやめた。

その夜半、ふと目がさめた。晝の達磨の晝のことが
氣になつてゐた。いろ／＼と達磨の晝のことを考へ



(筆天二本宮) 圖鳴鳴木枯

てゐた。その時ふと思ひあたることがあつた。さうだ。

彼は起き上つて、燈火の下で達磨の晝をかいた。今度は會心の出來だつたと見えて、かき上げた時、彼は始めてにこつとした。

翌日、門人にその晝を見せていつた。

「昨日の晝は主君のおたのみだと思ふので、いゝ晝をかきたいと思つた。それがさはりになつて、どうしてもかけなかつた。夜、ふと目がさめた時、試合の時の無心の氣持でかけばいゝと思つた。それでかいたら、どうにかものになつた。私は、太刀を取つて立つ時は、我もなく、敵もない、天地を看破る見地で、少しも怖しいとは思はない。所が、晝の方では、残念ながら、劍法の足許にもよれない。」

門人はそれを聞いて、今更に感心した。其處までゆかなければ嘘だと思つた。

(日本の偉れた人々)

國木田獨歩
名は哲夫
詩人 小説家
千葉縣の人
明治四十一年
歿 年三十八
九月七日
明治二十九年
九月七日

一二 武藏野日記

國木田獨歩

九月七日 昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき、林影一時にきらめく。

同九日 風強く、秋聲野にみつ。浮雲變幻たり。

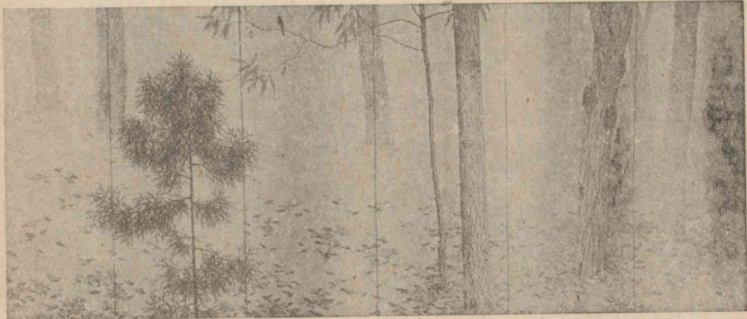
同十九日 朝、空曇り、風死す。冷霧寒露、蟲聲しげし。

天地の心なほ目さめぬが如し。

同二十一日 秋天拭ふが如し。木の葉火の如くか

がやく。

十月十九日 月明らかに、林影黒し。



落葉 (菱田春草筆)

同二十五日 朝は霧深く、午後

は晴る。夜に入りて雲の絶え間

の月牙ゆ。朝まだき、霧の晴れぬ

間に家を出で、野を歩み林を訪ふ。

同二十六日 午後、林を訪ふ。

林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睇

視し、默想す。

十一月四日 天高く氣澄む。

夕暮に、獨り風吹く野に立てば、天

外の富士近く、國境をめぐる連山

地平線上に黒し。星光一點、暮色

漸く到り、林影漸く遠し。

同十八日 月を踏んで散歩す。青煙地を這ひ、月光林に碎く。

同十九日 天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中、緑樹を雜ふ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み、黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる。

同二十二日 夜更けぬ。戶外は、林をわたる風聲ものすごし。滴聲頻りなれども、雨は已に止みたりとおぼし。

同二十三日 昨夜の風雨にて、木の葉殆ど搖落せり。稻田も殆ど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ。

同二十四日 木の葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐かし。

同二十六日 夜十時記す。屋外は風雨の音ものすごし。滴聲相應ず。今日は終日霧たちこめて、野や林や、永久の夢に入りたらんが如し。午後、犬を伴うて散歩す。林に入り、黙坐す。犬眠る。水流林より出て林に入り、落葉を浮かべて流る。折々時雨しめやかに林を過ぎて、落葉の上をわたりゆく音靜かなり。

同二十七日 昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うらゝかに昇りぬ。屋後の丘に立ちて望めば、富士山眞白に連山の上に聳ゆ。風清く氣澄めり。げに初冬

の朝なるかな。田面に水あふれ、林影倒に映れり。

十二月二日 今朝霜雪の如く朝日にきらめきて見事なり。暫くして薄雲かゝり、日光寒し。

同二十二日 雪始めて降る。

一月十三日
明治三十年一
月十三日

一月十三日 夜更けぬ。風死し、林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて、戶外をうかゞふ。降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武藏野沈黙す。しかも耳を澄ませば、遠き彼方の林をわたる風の音す。果して風の聲か。

同十四日 今朝大雪。葡萄棚墜ちぬ。夜更けぬ。

梢をわたる風の音遠く聞ゆ。あゝこれ武藏野の林より林をわたる冬の夜寒の凧なるかな。雪どけの滴聲軒をめぐる。

同二十日 美しき朝。空に片雲なく、地に霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。

二月八日 梅咲きぬ。月漸く美し。

三月十三日 夜十二時。月傾き、風急に、雲わき、林鳴る。

同二十一日 夜十一時。屋外の風聲をきく。忽ち遠く、忽ち近し。春や襲ひし、冬や遁れし。

(獨歩全集)

一三 冬山

前田夕暮

前田夕暮
名は洋三
歌人
神奈川県の人
明治十六年生

子供らは土手にひそまり空をみるまた
一人きてならびたるかも

硝子戸の外は海なりくろぐるとうねり
たかまる日の暮れゆけば

さうさうとわが寝ねてゐる床下を雪解
の水のながるる音す

親しきは海邊の岡の青菜畑日がいつば
いにあたりてゐるも

若山牧水

冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ
澄めるむらさきにして

若山牧水
名は繁
歌人
宮崎縣の人
昭和三年歿
年四十四

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家
の冬の夕餉なりけり

風立てば沼のくまわのかたよりに寄り
てあそべり鴨鳥たちは

大雨に打たれ静まれるとりどりの庭木
のなかに梅の花白し

わがこころ澄みてすがすがし三月のこ
の大雨のなかを歩みつつ

北原白秋

北原白秋
名は隆吉
歌人 詩人
福岡縣の人
明治十八年生

瓦斯の燈に吹雪かがやくひとところ夜
目には見えて街遙かなる

木の枝に雀一列ならびゐてひとつびと
つにもの言へりあはれ

霧雨のこまかにかかる猫柳つくづく見
れば春たけにけり

芥川龍之介
 小説家
 東京市の人
 昭和二年歿
 年三十六
 小田原
 神奈川県足柄
 下郡小田原町
 熱海
 静岡県熱海市

一四 トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始つたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といつたところが、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて来る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の半纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり、——良

平はそんな景色を眺めながら、土工になりたいと思ふことがある。せめては一度でも、土工と一緒にトロッコに乗りたいたいと思ふこともある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止つてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早いから、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時、乗れないまでも、押すことさへ出來たらと思ふのである。

或夕方——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いて

ある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつたまゝ、薄明るい中に竝んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロッコはさういふ音と共に、三人の手に押されながら、そろ／＼線路を登つて行つた。

その中にかれこれ十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押して

も動かなくなつた。どうかすると、車と一緒に押し戻されさうになることがある。良平はもういゝと思つたから、年下の二人に合圖をした。

「さあ、乗らう。」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。トロッコは最初徐ろに、それから見る／＼勢よく、一息に線路を下り出した。その途端、つき當りの風景は、忽ち兩側へ分れるやうに、ずん／＼眼の前に展開して來る。——良平は顔に吹きつける日の暮の風を感じながら、殆ど有頂天になつてしまつた。

しかし、トロッコは二三分の後、もうもとの終點に止

つてゐた。

「さあ、もう一度押すんだ。」

良平は年下の二人と一緒に、又トロッコを押し上げにかゝつた。が、まだ車輪も動かないうちに、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならず、それは聞え出したと思ふと、急にかういふどなり聲に變つた。

「この野郎！誰に斷つてトロに觸つた？」

其處には、古い印半纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、脊の高い土工が佇んでゐる。その姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一緒に、もう五六間逃げ出し

てゐた。——それぎり、良平は使の歸りに人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗つてみようと思つたことはない。

その後、十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過の工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。すると、土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。「この人たちならば叱られない」——彼はさう思ひながら、トロッコの側へ駈けて

行つた。

「をぢさん。押してやらうか。」

その中の一人、——縞のシャツを着てゐる男は、うつむきにトロッコを押したまゝ、思つた通り快い返事をした。

「おゝ、押してくれ。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「お前はなか／＼力があるな。」

他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その中に線路の勾配はだん／＼樂になり始めた。

「もう押さなくともいゝ、——良平は今にもさう云はれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押し續けてゐた。良平はたうとうこらへ切れずにおづ／＼こんな事を尋ねてみた。

「何時までも押してゐていゝ？」

「いゝとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思つた。

五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつ

も日を受けてゐる。

「登り路の方がいゝ、何時までも押させてくれるから」
 良平はそんなことを考へながら、全身でトロッコ
 を押すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを著てゐる男は、良平に「やい、乗れ」と云つた。良平は直ぐに飛び乗つた。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひたひたりに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずつといゝ」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が

多い」——さうもまた考へたりした。

竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になつた。爪先上りの所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登りきつたら、今度は高い崖の向うに、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎたことが、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコに乗つた。車は海を右にしなが
 ら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつ

きのやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。「もう歸つてくれ、ばい、」彼はさうも念じてみた。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れないことは、勿論彼にもわかりきつてゐた。

その次に車の止つたのは、切り崩した山を背負つてゐる、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつた上さんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は獨りいら／＼しながら、トロッコのまはりをまはつてみた。トロッコには岩乗な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

少時しばらくの後、茶店を出て來しなに、巻煙草を耳にはさん

だ男は、その時はもうはさんでゐなかつたが、トロッコの側にある良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがたう」と云つた。が直ぐに、冷淡にしては、相手にすまないと思ひなほした。彼はその冷淡さを取繕ふやうに、菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂を向うへ下りきると、又同じやうな茶店があ

つた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸ることばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかゝつてゐる。「もう日が暮れる。」彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つてみたり、一人では動かないのを承知しながら、うんうんそれを押してみたり、——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「お前はもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだ

から。」

「あんまり歸りが遅くなると、お前の家でも心配するだらう。」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍あること、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならぬこと——さういふことが一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方ないと思つた。泣いてゐる場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御辭儀をすると、どん／＼線路傳ひに走り出

岩村
足柄下郡岩村

した。

良平は暫く無我夢中に線路の側を走り續けた。その中に懐の菓子包が邪魔になることに気がついたから、それを路傍へ抛り出すついでに、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へぢかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時々涙がこみ上げて來ると、自然に顔が歪んで來る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。竹藪の側を駈け抜けると、夕焼のした日金山の空も、もう火照が消えかゝつてゐた。良平は愈氣が氣でな

日金山
熱海市の西北
に在る

かつた。往きと還りと變るせぬか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は著物までも汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈け續けながら、羽織を路傍へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——」良平はさう思ひながら、三つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかし、その時もべそはかいたが、たうとう泣かずに駈け續けた。

彼の村へはひつてみると、もう兩側の家々には、電燈

の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘ぎく走るのを見ては、「おいどうしたね」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集らせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、噉り上げく泣き續けた。

その聲が餘り激しかつたせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は、何と云はれても、泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈け通して來た今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても足りない氣持に迫られながら……

(芥川龍之介全集)

一五 吹雪

村井弦齋

一

「雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越え。」それは彌生の春の頃櫻狩して行く道の眺めも飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風、膚をつんざく。辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景、辛崎の松は暮靄の中に隠れ、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の峯、今よりこの山路にかゝらば、山中にて日は暮れ

村井弦齋
名は寛
小説家
愛知縣の人
昭和二年歿
年六十五
滋賀の山
現大津市の西
北方に在る山
辛崎の松
現滋賀縣滋賀
郡下坂本村に
在った
辛崎の夜雨は
近江八景の一
堅田
現同郡堅田町
堅田の落雁は
近江八景の一
比良の峯
現同郡の北部
に在る
海拔一一七四
米
比良の暮雪は
近江八景の一

坂本
現同郡坂本村

母君
中江藤樹の母
名は市
北川氏



比良の白雪

山路にこそはかゝりけれ。

ん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿りを求めんかと、獨旅の少年は、前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に著くなるに、何とて空しくこゝに留らん、夜にてもあれ朝にてもあれ家に歸るを得ば、疲も厭はじ、いでいで今宵の中にこの山を越えんと、再び足を踏みしめて、薄暗き

藤太郎
 中江藤樹の幼
 名
 藤樹は號
 名は原
 儒者
 近江國(滋賀
 縣)の人
 慶安元年(二
 三〇八)歿
 年四十一

いたはしや藤太郎、母に逢ひ度き一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて唯一人、たどりくゞて行く道の、岩に躓き、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出でて、道の邊の雪を紅に染めながら、尙も心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、いや増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍らんばかり。寂莫たる満山、耳に聞ゆるものとは、閉ぢし氷の下潜る、細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響など、幽かに物凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやう無し。斯かる難所と知りもせば、麓にて一夜を明かし

しものを、旅馴れぬ身の悲しさに、足に任かせてこの深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出られず、後へも戻られず。

藤太郎は進退きはまりて、半ば死せるものの如く、松の根方に打倒れたり。その儘起きも上らず、降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、次第に餓を感じ、寒さは一入身にしみ渡り、いつしか眠るともなく、前後も知らずなりにけり。

二

危き命を一老僧に助けられし藤太郎は、急ぎ麓に下り、志す小川の里に辿り著きぬ。懐かしの故郷や、藤太

小川
 現滋賀縣高島
 郡青柳村小川

郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方に向かひけり。夜は漸く明けたれども、雪空の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起き出でず。かの家は我が友の家なりけり、この家には我に優しき老人ありきなど、昔を思ひ出で、そゞろに哀を催しつゝ、やがて我が家の前に來れり。見れば、衡門は舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちてまた昔日の觀あらず。柱は傾き、築地は崩れ、前庭の古松、刈る人無ければ枝繁れり。修竹一叢、思ふまゝに根を延ばせしと見え、彼方此方に生ひ茂り、若きは雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず、母君は

未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方をうかゞへば、車井戸の軋る音寒げに聞えて、何人か水を汲めり。見れば確に母の姿、藤太郎は忽ち胸ふさがりぬ。昔は數多の男女を使ひて、勝手などに出られしことなき母上が、この雪の朝の寒空に、自ら水を汲み給ふか、いたはしと、わき出づる涙止め敢へず、急ぎ井戸の側に駈け行きて、後よりその袂を引き、「母様、私が水を汲ませう」と、涙ながらに取りすがる。事の不意なるに、母は驚きて振返り、「誰か。おや藤太郎。どうしてこゝへ。」「はい、母様の御手助を致しに參りました。お話は後で申し上げます。先づお内へ御

入り下さいませ。あれ、お頭（かしら）へ雪が掛ります」と、孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしむるに忍びず。母は車井戸の綱をしかと握りしまゝ、石の如く立ち、御祖父様とでも御一緒か。「いえ、一人で御座います」といふに、母は聲を勵まし、「御祖父様がそなた一人をお出しなされたか。「いえ、知らせずに参りました。」母は眉を揚げ、「なぜそんな事を。」——さつと吹き来る朝嵐に、地上の雪はくるくると捲き揚げられて、横に二人の顔を撲つ。母は我が子の優しき心に暫し涙に咽びしが、忽ち思ひ返して聲を勵まし、「そなたはこの母の言葉を忘れませんでしたか。そなたを御祖父様にお頼み申した時、一旦國

大洲
現愛媛縣喜多
郡大洲町

を出たからは、立派な人にならぬうちは、決して中途で歸るなど、あれ程堅く言ひ聞かせたではないか。この母が難儀を忍ぶのも、唯そなたを立派な者にしたいばかり。立派な者にもならないで、家に居て、手助をしてくれたとて、なんのそれが嬉しからう。一人で来たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び會ひませぬ。その足ですぐ大洲へお歸りなさい。」
餘りの事に藤太郎は、默然として言葉も出でず、雪の上に跪きぬ。母はその有様を見て、いたはしさ胸に満ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを——百里の道の獨り旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん

を、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするをまた思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「そなたは母の言ふ事がわかりませぬか」と強くは叱れど、聲はうるみぬ。

藤太郎は、落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい、わかりました。」それならば、今から歸りますか。「藤太郎は悲しげに、「はい、歸ります」と素直に言ふ。母は尙更腸の絞らるゝ思、遂に堪へかねて、袖かみしめて聲をのむ。

藤太郎は、きつとして立上れり。「母様、この薬はあか

ぎれの妙薬で、世にも得難い品。差上げ度いと思つて、わざ／＼持つて參りました。これだけはお取りなされて下さりませ」と、一包の薬を母の前に出す。母は快く、「お、そなたの志、これだけは受けませう」と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとして上を向く。見合はす互の眼には涙一ぱい。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、何時の間に張りけん、上は一面の薄氷。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返る子、満天の風雪、路悠々。

(近江聖人)

エヂソン
1847—1931
アメリカの大
發明家

一六 人間エヂソン

エヂソンの最も著しい特性は、その偉大なる精力主義であらう。彼の強健と精力とは、或點までは生まれつきである。が、しかし決してそれだけではない。といつても、彼の生活は若い時から寸刻の餘暇もない奮闘の連続であつて、別に運動や旅行を嗜んだのでもなく、特に健康法や養生法を講じたわけでもない。それでは彼の精力主義の秘訣は一體どこにあるか。その一つは睡眠である。彼の睡眠時間は極めて短い。が、その代りぐつすり寐込む。彼は青年時代から

夢といふものを見たことがないといふ。彼の一時間の睡眠は、普通の人の三時間、四時間の睡眠に値するのである。「私は仕事に精力を集中するやうに、眠るにも



エヂソン

眞剣に集中的に眠るのだ」と、彼自らもいつてゐる。

集中、こゝに彼の生活の秘密がある。實際、仕事に對して彼の如く熱中する人は少い。併し、一度疲勞を覺えると、惜し氣もなくそれを抛り出して、直ぐ他の仕事にとりかゝる。そしてその仕事に、また同じ様に精根を傾ける。研究する時は徹底

的に研究するが、一旦それから手を引いたら、からつと忘れてしまふ。これも彼の健康法の一つである。

次には、彼はその生活にも、また仕事にも、一つの「歩調」をもつてゐるといふことである。「エヂソン傳」の著者ブライヤンはかういつてゐる。「著者はある時伸銅工場を見せて貰つたことがある。その時エヂソンは、一群の労働者が悠々と働いてゐるのを指して、『あの人々はいつも重い金屬を取扱ひつけてゐるものだから、あはして悠々たるやり方をしてゐるが、あれはみんな經驗の結果なのだ。あのゆつくりした労働の調子が一番能率もあがり、疲労も少いのだ』といったが、エヂソン

ブライヤン
1879—CC
アメリカの著
述家

の仕事のやり方もさうである。誰もエヂソンが怠けてゐるのを見た者はない。それと同じく、誰もエヂソンの急いでゐるのを見た者もない。彼は不撓不屈の精力をもつて、悠然と歩み續けるのだ」と。

彼は科學・藝術・工業のあらゆる部門に興味をもつてゐる。そして、天文學・物理學・機械學・電氣學・化學・植物學・經濟學・音樂・哲學等、苟も世界の進歩に貢獻しつゝあるものは、何でも讀んでゐる。科學協會の報告書や主なる科學雜誌も全部讀んでゐる。それから、一般向きの雜誌にも目を通して、世界の動きを知らうと努めてゐる。かくの如くにして、彼は世界の歩みに後れないや

うに、彼自身の住んでゐる、この動きつゝある大世界と一緒に生活するやうに心がけると同時に、この讀書によつて、生活の一分々々を楽しんでゐる。しかし、彼の仕事の中には、時には又、他人から見れば全く無意味としか思はれないやうなこともある。或時、一人の人がタイプライターで三十枚ばかりの原稿を打つて、彼の校閲を頼みに來たことがあつた。彼はそれを自邸に持ち歸つたが、普通にするやうに、赤インキで訂正したり書きこんだりすれば、恐らく三十分もかゝれば済む仕事である。ところが、彼は机に向かつたと思ふと直ぐ萬年筆でそれを寫し始めた。そして、丁寧に不滿の

箇所を訂正しながら、ペンを走らせてゆく。一晩中かうして働いて、翌朝その原稿を返してやつた。

かういふことは、彼には決して珍しくない。これはおそらく、彼が勤勉の習慣をつけるには常に特別な訓練の必要であること、又いかなる場合にも、自分の衷に怠けようとする傾向の起つて來るのを許してはならないことを體感してゐるからであらうといふ。してみれば、彼の類まれな精力主義も、決して單なる天性ではなくて、やはり絶えざる努力によつて、長い間に養ひ得たものであるといはねばならぬ。

エヂソンの、も一つの特性は、その愉快な樂天性であ

る。すべて樂天は強烈な自信から生ずる。彼は自信が強い故に、失敗といふものを認めない。随つて又、彼は失望といふものを知らない。倒れても直ぐに起き上つて、一路、初一念に向かつて猛進する。

この樂天的性質が最も強く現れたのは、彼の鑛山事業失敗の時であらう。五年のながい奮闘が、一時の自然の悪戯のために跡形もなく崩れ落ちた時、そして四十年にしてやうやく築き上げた發明王國さへも危機に瀕した時、——その時、泰然自若として、少しの憂色さへ面に現さず、靜かに後圖をめぐらすといふのは、尋常一様のことではない。彼はいふ、私は幸にして、何時で

も直ぐに過去を忘れて將來を考へるといふ習慣にならされてゐた。それが私に幸した。あの時は流石に三日ばかりはいろ／＼なことが考へられた。しかし將來の考が熟するに随つて、もう過去の失敗のことなど頭の中に入つて來る餘裕はなかつた」と。

昨日を忘れて明日を思ふ心、それが奮闘生活の祕訣であり、樂天的性格の強みである。若しこの恵まれた性格がなかつたならば、彼の事業は幾度蹉跌したかわからない。なぜならば、鑛山事業失敗の時のやうな劇的事件は多くはなかつたけれども、それに似た失敗は、發明の途中に幾つも横たはつてゐたからである。

或時、助手の一人が、實驗の結果がどうしても思ふ様に出で來ないので、完全な失敗として、失望に沈んでゐる所へ、エヂソンが入つて來た。彼はその事實を詳しく調べた後、快活な聲でいつた。「君、それを失敗だと思つてはいけない。僕はあらゆる實驗を成功だと考へてゐるのだ。どんな場合にも、實驗は疑を解いてくれる。たとひ求める結果に達する事には失敗しても、それは將來の仕事の手引として、貴重な教訓を與へてくれるものだ」と。彼が實驗家として成功したのは、大部分、この實驗に對する樂天的な性質のおかげである。エヂソンの、服裝に無頓著なのは、青年技手時代から

ニューワーク
メンロパーク
共にアメリカ
合衆國ニュー
ジャーシー州
の都市

有名であつた。ニューワークやメンロパークの研究所の主人となつてからも、相變らず藥品で汚れ、汗の染みた著物をきて平氣であつた。またそれでなくては、到底一日十九時間半といふやうな勞働は出來ないであらう。彼は平常寛な衣服を好んでゐる。靴も少しく大きめのを穿き、カラーは必ず低い折れたのをつけ、著物の色は沈んだ目立たないのを用ゐてゐる。

エヂソンに於て、簡素なのは服裝ばかりではない。生活全體が簡素そのものである。人との應接も簡素だ。そして單純に、直截に、腹藏なく話すうちに、彼獨得の機智とをかしみを交へ、相手に非常な好感を與へる。

しかしエヂソンは、所謂社交界なるものには決して顔出しをしない。人と交際するのが嫌ひなわけではないが、無意味に人と會つて、無意味な談話をするのが嫌ひなのである。又その時間もないのだ。エヂソンは實際忙しい一日を過してゐる。彼にとつては、その一分一分に意味がある。

最後に、人間エヂソンについて、われわれの最も尊敬にたへないのは、彼が少しもその功績を誇らうとしない、謙遜な心の持主であることである。この謙遜は、やはり彼の強烈な自信から生まれて來たもののやうに思はれる。自ら信ずることの厚い人は、世に認められ、

人に賞讃されることを要しない。彼のすべての發明、すべての事業は、たゞ彼のやまれぬ内心の要求から生まれたものである。随つて、彼は内心の命令によつて働き、内心の満足を得れば足りる。功業や名譽が彼の目標ではない。しかも、この名譽を求めず、功業を誇らうとしない謙遜な心の中に、次から次とやむことなく生まれて來る發明の泉があるのである。

エヂソンが謙遜なのは、しかし人間に對してばかりではない。すべて偉大な心に共通な要素は、より偉大なものに對する謙虚な態度である。大宇宙の神祕を探ることが深ければ深いだけ、大社會との苦闘が激し

ければ激しいだけ、人間の心はより嚴肅に自然と人生とを眺めざるを得ない。エヂソンも亦かういふ偉大な心の持主である。彼はいつてゐる、科學の到達し得る最後の結論は、到る處に偉大な靈智の働が現れてゐるといふことに外ならない。長い間自然の順程を見守つてゐる間に、私は萬物の間に流れる靈智の存在を疑ふ能はざるに至つた。それを疑ふことは、自分にとつては、自己の存在を疑ふに等しいと。彼のこの言葉の背後にひそむ學識と、彼をしてそれを認めしめるに至つた探索の苦闘とを思ふとき、われは肅然として襟を正さざるを得ない。

(澤田謙著、エヂソン傳)

ラスキン

1819—1900

イギリスの思

想家・評論家

一七 水

ラスキン

他の補助を受けず、他と結合せず、己が本來の性情に随つて活動する總べての無機物のうち、最も不可思議なものは水である。

雲のあらゆる變化、美象がその源を水に發すること
を思ふ時、大地をしてその均整の美を整へしめ、その巖
石を優婉なる姿に彫刻したものが同じく水であること
を思ふ時、更に自己の造つた山嶽を、纏ふに雪の衣を
以てし、親しく見なければ、想像の及ばぬ程の陸離たる
光彩を放つ時、急湍激して泡沫と散り、その上に架する

虹霓と現じ、これから立昇る朝霧と變じ、懸崖逆さまに映ずる水晶の深淵を湛へ、渺茫たる湖沼、洋々たる河川となる時、最後に、萬人の眼に不屈不退轉力の絶好の表徴たる、かの狂暴怪異變幻不測なる、漫々たる海洋に統一せらるゝ時、この偉大普遍な一原素と壯麗優美を競ひ得るものが何處にあらうか。その無限に變化する情緒をどうして捕へることが出來ようか。恰も心靈を繪に表さうとすると一般、到底不可能であらう。

どんな路傍の池や水溜りにも、その水上にあるに劣らない風景が、その水中に存する。それは、我々の考へ

るやうな、茶褐色の泥深い死物ではない。それには、我人人間のやうな優しい心があり、その底には、高い樹木の梢、風に戦ぐ草の穂、青空から來るあらゆる色彩の變化に富んだ心地よい光を湛へてゐる。否々、穢れた都市の奥深く、下水口に停滯する醜惡なる溝すら、全然賤しむべきものではない。その水中を深く、覗き込めば、遙か彼方の大空の森嚴深邃なる碧色と、過ぎ行く白雲とを認めるに相違ない。人々の賤しむこの流れに、街衢の塵芥を見ると蒼空の姿を見るときは、見る人の心次第である。凡そ我々がつれなく排斥する世の事物に於て殆ど皆さうである。

疾風が三四日間、晝夜吹き通した後の海の姿を見た人は比較的少からう、又見なかつた人には全く想像がつかないに相違ない。單に、波濤の力又は大きさが想像に及ばないばかりでなく、海と空との區別が全く無くなつてしまふからである。

海水は長時間の振蕩の爲、單にクリーム狀の泡沫となるばかりでなく、堆い酵母狀の集りと化し、それが或は綱索の如く、或は花環の如く、波から波へと懸り、一つの波が將に碎けんとして逆卷く時、その端から、恰も裝飾様の花綵のやうに垂れ下る。この花綵狀の泡沫が

風に奪はれる時、粉末となつて四散せず、その形のまゝ、くねりつ、巻きつ、垂れ下りつ、空に舞ひ、恰も白雪の如く空に立籠め、その一片だけでも一二尺の長さを有する。又下なる波濤そのものが全體泡から出來てゐて、恰も大瀑布の瀧壺の水のやうに底の底まで眞白である。かやうに波濤全體が半ば水、半ば空氣から出來てゐるから、それが逆卷いて立上る時は、何時も風の爲に寸々に粉碎され、轟々叱咤する煙となつて運び去られ、これに面した時は、實際の水の如く息がつまつてしまふ。その上に、若し大氣が長雨の爲に全くその水分を吐き盡くしてゐるとすれば、海波の揚げる水沫は大氣の爲

に奪ひとられ、海面は單に細かく粉碎した水煙を以て覆はれるばかりでなく、沸騰する雲霧に閉される。又私の屢見たやうに、密雲低く垂れて殆ど海に觸れんとし、波より波へと雨雲の引裂けたやうな斷片が飛び交ふこともあれば、最後に波濤それ自身が、この混沌たる最中に、強大奔亂狂暴の極、大空目掛けて奔騰し、その上昇の勢が激しい爲に幾多の褶を造りつゝ、斷崖となり、峻峯となるに到つては、海と空との見境の全然つかなくなる事がわかるであらう。こゝに到つては、地平線も、陸標も、その他方向を示す何等の自然物も眼に入らない。天空は總べてこれ泡沫であつて、大海は總べ

てこれ雲霧である。何れの方向に向いても全く眼界を閉されてゐることは、恰も布に面して立つやうであらう。

かやうな時に海を見る機會を得た人は殆どない、たとひその機會を得ても、この海に面を向け得る人は少い。檣又は岩石に縋つてこれを注視するのは、恰も水に溺れようとするのを永く耐へると同様、大抵の人には勇氣がない。勇氣のある人にとつては、これこそ自然の最も崇高な一教訓であらう。

(澤村寅二郎譯、ラスキン抄)

澤村寅二郎
英文學者
文學博士
東京高等學校
教授
東京帝國大學
助教授
京都市の人
明治十八年生

橘南谿
名は春暉

國學者

醫師

伊勢國(三重

縣)の人

文化二年(二

四六五)歿

年五十三

一八 蜃氣樓

橘 南 谿

唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり。又海市といふ。海上に雲の如くに氣立ちのぼりて、樓臺城郭の形を現し、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて、空中に樓閣の形を現すなりと。又、蜃といふは、其の形龍の如きものにて、海中に住んで、氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。色々の説あり。蘇東坡なども、南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りしことあり。唐

蘇東坡

名は賦

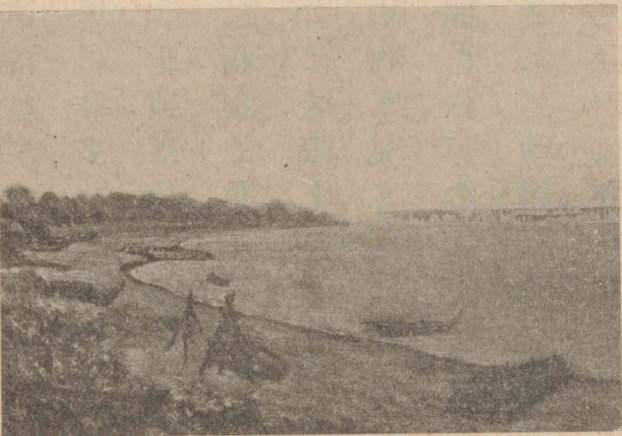
支那宋代の文

豪

皇紀一七六一

年歿

土にては甚だ珍しがりて賞翫することとぞ。



魚津の蜃氣樓

我が國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此の蜃氣樓は甚だ稀なり。唯越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞み渡りて、一面の鏡の打曇れるが如き日に、此の蜃氣樓を結ぶ。

毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶことあり。誠

越中の魚津
現富山縣下新
川郡魚津町

に唐土の人のいへる如く、海上に煙の如く雲の如く次第に結び來りて、遂には樓臺の如く、或は城郭の如く、人馬の往來せるが如きも、歴々然として見ゆ。

北地に我が親しく交りし宮島式部大夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は幕を引けるが如くなりしが、暫く見る間に、城郭の如く、矢倉高塀やうの物も見え、矢間やまなどの如き物も見えしが、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうに見えぬ。夕暮に及び風少し出でたれば、漸々に消え失せて、跡形もなくなりしとなり。富山よりはわづかに六里を隔てたる所なれば、城下の人々皆見物したく思へ

天の橋立
現京都府與謝郡府中村に在る
日本三景の一
富山
現富山市

ども、何時に結ぶやも知れ難く、又結びたる時、急に人して告げ知らずとも、其の間には消え失せて見るべからず。此の故に、魚津近所の海邊の人は例年見ることをれど、二三里を隔てたる地方の人々は一生涯終に見ざる人多し。

余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して、蜃樓を見るべしと人々に勧められ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし比は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せんことあまり長々しければ、残念なりしかども見ずして越後にこえたり。越後の糸魚川にて、松山茂叔に此の事を語りしに、此の人も

越後
越後國
現新潟縣の内糸魚川
現同縣西頸城郡糸魚川町
松山茂叔
名は造
儒者
越後國(新潟縣)の人
寛政六年(二四五四)歿

「糸魚川の海中遙かに山の出で来るを見たり。漁人のいひしは「これは鹽山といふものにて、折々見ることをなり」といひし」と語られき。

余、初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大洋にあることにて、陸地近き入海にはなきこと、やうに心得しが、魚津の地理を見るに、さにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風の如くに見る、東よりの入海なり。海中より蒸し昇る陽氣、向ふの山に映じて、色々の形を見するなり。向ふに當なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣昇るといへども、向ふの當無ければ映ず

能登國
現石川縣の内

伊勢の桑名
現三重縣桑名
市

尾張
尾張國
現愛知縣の内
三河
三河國
現同縣の内
安藝國
現廣島縣の内

東遊記
五卷
遊行記
寛政九年（二
四五七）刊

ることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ。伊勢の桑名の海にも三十年、五十年の内には、たま／＼蜃樓を結ぶことありといふ。これも向ふに尾張、三河の山を受けてあるゆゑなるべし。また安藝國にてもまたまはありといふ。これも向ふに山あり。其の外の國にては蜃氣樓を結ぶこといまだ聞かず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべきことなり。

（東遊記）

相馬御風

名は昌治

評論家 隨筆

家 歌人

新潟縣の人

明治十六年生

一九 雪國の春

相馬 御風

一時は一丈餘もあつた雪がいつの間にか消えて、七十餘日目で私達は庭の黒土を踏むことが出来た。

そこにはもう黄水仙のみづくしい色の芽が二寸ほども伸びてゐた。芍薬の赤い芽も一寸以上伸びてゐた。はこべや地しばりなどの雑草はいつしかすつかり起き直つて、春の陽を吸つてゐた。庭隅にほこぼこ頭を竝べてゐた蔦の臺は、僅か二三日のうちにはほぐれて花をのぞかせてゐた。どんなに深く積つた雪でも、不思議に地面との間が一寸も二寸もすいてゐるも

ので、草々の芽はその間隙に春を待ちつゝ、顔をのぞかせてゐたのだ。

雪の底に押し伏せられてゐた庭の楓も、雪の消えた當座は押し伏せられたまゝの形でゐたが、この四五日の天氣つゞきですつかり起き直つて、枝といふ枝は、日に日に大空の方へ、太陽の方へと伸び上りつゝある。そしておのづから彼等の枝ぶりをなほし、全體の容姿を整へつゝある。

潮風の荒い海岸の松の木や、雪の深く積る山地の樹木などに、私達は植木屋の苦心慘澹して造つた庭木や盆栽などよりも、遙かに風情に富んだ容姿を見ることが

が少くないが、さうした天然の樹木の美しい容姿を見るたびに、私はそこに年中風雪と闘ひ、寒暑と闘ひ來つた彼等の雄々しさを感ずるのである。

敲かれ、曲げられ、折られ、壓し伏せられつゝも、彼等は雨の情、日光の恵を力に、いつしか自らの姿を整へて來たのである。自然は、一方には彼等に對して暴虐を敵であるが、他方には温かな慈母の胸である。山上に立つ老木の姿は、自然の暴虐に對する雄々しい闘によつて、傷つきながらも生きぬいて來た勇者の姿であると同時に、それはまた、慈母の胸に抱かれて、あらゆる悩み、あらゆる痛みから救はれた和やかな姿でもある。折

られたり、ゆがめられたり、矯められたり、伏せられたりした彼等の部分々々には、風雪とのいたましい闘の名残は見えるが、それを和らげ、整へ、調和あらしめてゐる全體の容姿には、慈母の如き自然の愛が象徴されてゐる。

私は長い冬の惰性から、兎角まだ離れ得ないでゐる茶の間の爐邊に坐つて、目に――姿を整へて行く雪折れのひどい庭木を眺めながら、今更の如く、一方に生命の力の強さを感ずると共に、他方にそれをいたはり力づけつゝある春の恵の大きいのに驚いてゐる。

畑には、地面にへばりついたやうに雪に壓されてゐ

た麥が、日一日と起き上り、伸び立ちつゝある。秋のうちには芽をだしてゐた豌豆の苗も、やがては卷蔓の手を伸ばしはじめたらう。雪國では麥踏みといふことをする必要はないが、南國ではわざ／＼麥を人間の足で踏みつけるといふ。麥のやうに壓されるほど成長のよいものがあるといふことは、何としても面白い。雪國の春の地面は、この壓しつぶされてゐた草木の新を起上りと、成長との活舞臺である。

(砂に坐して語る)

二〇 櫻井驛

眞山青果

眞山青果
名は彬
劇作家
仙臺市の人
明治十一年生
櫻井驛
現大阪府三島
郡島本村櫻井
男山八幡宮
石清水八幡宮
現京都府綾喜
郡男山に在る
官幣大社
生駒山・十三峠
金剛・千早
いづれも大阪
府と奈良縣と
に跨がる金剛
山脈の連峯
正成
楠木正成
左近滿一
恩地滿一
正種
楠木正種
正房
神宮寺正房

時は、延元三年五月二十二三日頃の明方。處は攝津國三島郡櫻井驛。西國街道は下手より上手に向かつて走り、竝木がまばらにある。その手前に、老松が一株、幹なかば朽ち、その一枝は低く地を這ふやうに垂れてゐる。竝木を透かして淀の川原が望まれ、對岸には、河内街道が霞んで見え、男山八幡宮の青葉が鬱蒼としてゐる。男山の丘陵を起點として、東南に生駒山・十三峠の山脈がなびき、南方には河内の山々が遠く望まれ、模糊の間に金剛、千早の諸峯も指點せられる。

正成、竝木の外に立ち、遙かに河内の方に向かひ、合掌して氏神に祈る。左近滿一、郎黨に指揮して先づ陣幕を張らせる。正成、正種、正房等の姿、陣幕の外に隠れる。

正行
楠木正行
正成の子
正平三年(二〇〇八)歿
年二十三
夫人
正成之妻

正季
楠木正季
正成之弟

郎黨先づ菊水の旗を老松の邊に立て、楯を伏せ敷皮を敷いて正成の席をつくり、その前なる青草の上に圓座を置いて正行の席となし、遙か離れた下座に、夫人の席を設ける。程なく、他の郎黨二人、鎧櫃の上に飾つた新しい鎧を搬び來り正行の席と母の席との中央背後に置く。
や、暫くして、都見物の賤の女に扮した夫人が、郎黨の一人に導かれてつゝ、まじやかに入り來る。軍旗に一禮して、設の席に著く。正季、正種、その他の一族次第に集り、後方の芝生に坐す。
暫くして、多聞丸正行の左近と争ふ聲。

正行 いやぢや、いやぢや、なぜ多聞のみ鎧を脱ぐのぢや。

左近 父君の仰せぢや、脱がしめ。

正行 たとひ父上の仰せなりとも、正行一人脱ぐのはいやぢや。爺よ、いやぢや。

左近 (泣聲にて) 父君の仰せぢや。脱がしめ。

正行 え、正行一人に恥辱を與へるのか。父上、父上！

正行、鎧下姿のまゝ、幕の中に入り來る。

夫人 これ、多聞丸！

正行 (始めて氣づき) おゝ、母上。いつの程にお上りなされました。

夫人 先づこゝに來て姿を繕ひませう。

正行 いやでござります。正行、十一歳になります。いかに父上の仰せなりとて、さやうの御輕侮おんさげすみはうけ

ませぬ。

一族の部將次第に來り加る。

夫人 いえ、父上には何か深き思召のあること。先づ母の祝儀の品を御覽なされよ。

正行 (後に飾る新調の鎧を見て) おゝ、この鎧は――。

夫人 先年、赤坂合戦の時、母は六歳のそなたの黒髪を撫でながら、そなたの初陣には、母としての喜に、あつぱれ札さよき鎧を緘し、引出物に參らせんと約束しました。奈良の名人岩井いの法印が、二年餘りを費して緘し上げましたこの著背長は、そなたの初陣を祝ふ母の祝儀でござります。さし招き先づ装束を直しませ

赤坂合戦
元弘元年(一一九一)河内國赤坂(現大阪府南河内郡赤坂村)に於て正成が北條氏の勢と戦つた戦
奈良
現奈良市
岩井
具足師の名家

う。

正行 母上、そのお言葉に違はござりませぬか。

夫人 何で違がござりませう。

正行 昨夜よりの父上の御様子、多聞には何としても飲み込ませぬ。今日のこの大事の出陣に、正行に出でよとの仰せはござりませぬ。さりとして又、後に残れとのお言葉もなき故、雑兵の著る番鎧かきよろひのうちから、身に合ふ古鎧を探し出し、兜の親も頼まず、身に引つ掛けて、人數のうちに加りました。母上、正行は十一歳になります。どうあつても今日の初陣、人に後れは致しませぬ。

正行母の前に来り立つ。

河内
河内國
現大阪府の内

夫人（直垂の括緒つちを解き、水干の袖をのばしつゝ）おゝ、暫し見ぬ間に、大きうなられた。河内にゐられた頃から見れば、まるで別人のやうに成人しやつた……。

正行 母上。父上は読み書き、學問の道のみ勧めらるゝが、身は武將の嫡子、人に隠れて弓矢の道も勵みました。

夫人 おゝ、それは勇ましい……。

正房 入り来り、正成の来るを告ぐ。人々姿を正して待つ。夫人、正行をその席に著かせる。郎黨のかゝげる陣幕をくゞつて、正成、静かに入り来る。

正成（鎧を見て）おゝ、多聞丸が初陣のための料か。（鎧に手を觸れて見て）凜々しくも、立派な拵ぢや。あつぱれ主上の御爲に働き、世の鑑ともなれ。

正成 鎧に合掌し、わが席に著く。暫くの間、瞑目して無言。正行はその前に平伏する。雲雀の聲が聞えて来る。



大楠公
（横山大觀筆）

正成（靜かに）正行。

正行は。

正成 父が幾度か迷ひ、幾度かためらつた後、やう／＼に達した最後の斷案ぢや。靜かに聞け。そなたはこれより左近太郎等の一族、老功の郎黨を引連れて、川を渡つてあの街道を故郷河内に歸れ。

正行 えつ、（愕然として）そして父上には。

正成 残る七百の手兵を率ゐ、これより兵庫の合戦に向かふのぢや。

左近を初め一同思はず顔を見合はせ、屹として膝を進む。

正成（その動搖を威壓するやうに激しいけれど低い聲で）そなた

太郎

恩地興武

滿一の長子

故郷河内

現大阪府南河

内郡の内

兵庫

現神戸市兵庫

區附近一帯の

地

足利將軍
足利尊氏

中興の大業
建武中興
元弘三年後醍
醐天皇が北條
氏を討滅して
皇政を復古せ
られた大業

も、幼いとはいつても既に十餘歳、わが一言を耳に留め、深く思をひそめて、決してわが教訓に違ふな。凡そ今度の合戦は、天下安否の分かれるところ、今生にそなたの顔を見るのはこれが限りと思はれる。正成討死すれば、天下は足利將軍の意のまゝと思へ。

（暗然として目を伏せる。）

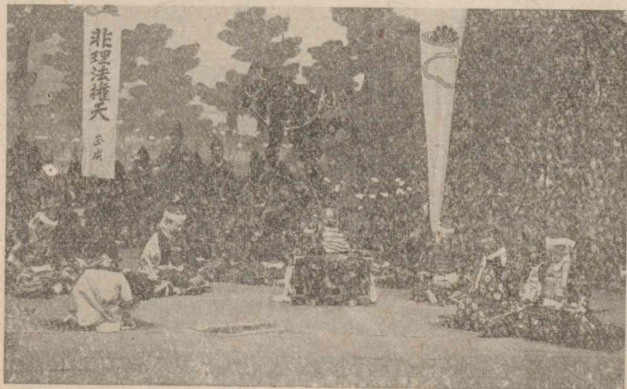
正行 主上はいかゞなり給ひまする。

正成 そのことである。折角思し立たれた中興の大業も、輔弼の臣にその人なき爲、空しく中道にして倒れ……主上は再び都を出でさせ給ふことにもならう。

正行 は――。

正行、落涙。一同も深く項を垂れる。

正成 正行。父が討死したと聞いても、決して慨き惑ふではないぞ。又、尊氏がいかに利をもつて勧め、情をもつて誘ふとも、彼等の前に降人に出で、また和睦などの術計に落ちてはならぬぞ。一族一人でも生き残つてあらば、あの金剛山のほとりから靜かに移り行く世の歩みを見守るがよい。



(面臺舞伎舞歌) 別訣驛井櫻

正行 父上、御仰せながら。

左近 (膝を進め正行と同音に) 殿、御言葉ながら。

正成 何を騒ぐのぢや。(一同を見わたした後、靜かに) 今正成が申し遣す言葉は、よくよくの大事であるぞ。抑、王事に竭くすとは、唯御身方に馳せ参じて敵と戦ふことばかりではない。天皇の爲し給ふところ、即ち善なるを確信し、天皇に隨ひ奉つてその善を成し遂げようとする堅い固い決心を持つことである。そこにわが國體が存立し、その威嚴が輝くのだ。

一同、肅然として耳を傾ける。雲雀の聲が聞えて來る。

正成 (軟らかに) それ故に、尊皇といひ、勤皇といふは、常に

善に勵み、正義を守ることには外ならない。正行、他日母上にも尋ね、自らも考へて、この旨をよく／＼會得せよ。正義とは、自ら惡を爲さぬばかりではない、不義を爲し、不善を行ふ者に對つて、絶えず反省を求めることである。正義に生きる者の存在には、常に惡人に恥を覚えしめ、その心を寒からしめる批判者の權威がある。世は今や、人心混亂をきはめ、武家も公家も、正しい判断を失つてゐる。されど、これも時の勢……、急に逆らひ、急に争つてはならぬ。暫く、時勢をして、その赴くに任かせる外はない。正行、そなたを河内に歸し、無援孤立の赤坂城に據らしめるのは、

尊氏に對して、天の一方、地の一角に、正成の血脈を傳へ、正しきを守つて動かぬ者があることを知らせ、正義の批判者は常に存するものであることを示したい爲だ。

俯向いて聞いてゐた正行、この時聲を立てて泣く。

正成（屹として）これから河内に歸り、孤立の一城に籠つて、尊氏と對抗するのが恐しいのか。

正行 いえ、父上。敵を恐れての涙ではござりませぬ。父上にはそれほどの大任が、この正行に負ひ得られようと思はれますか。

正成 何——。

先年
元弘元年
笠置の御座所
現京都府相樂
郡の笠置山に
在つた後醍醐
天皇の行在所

正行（すり寄り） 父上。それほどの大任ならば、父上には何故、御自身河内にお歸りはなされませぬか。先年、笠置の御座所に召されて、始めて御身方の義軍をあげられた時の勅答には、正成一人未だ生きてありと聞き召され候はば、聖運遂に開かるべしと思し召され候へ」と、伏奏なされたと承りました。今、主上の頼ませ給ふは、父上御一人、何故主上の御爲に生き残り、最後まで御奉公を盡くされないのをござりまする。

正成 父には當面の大事がある。

正行 え、當面の大事とは――。

正成 正義を守る者は、悪人の批判者となつて靜かにそ

の反省を求めると共に、時には起つてその罪惡と闘はねばならぬ。起つて闘ふ烈々たる氣魄と實力とのない批判は、眞の批判ではない。今、尊氏は惡逆を極め、禁闕を犯し奉らうとしてゐる。正成の正義心は、必死必敗と知りつゝも、その惡と戦はずにはゐられないことを、正義を守る者の意力の奪ふべからざることを、實行を以て示すのだ。そなたを河内に歸すのも、實力のない批判者にする爲ではない。慈悲を以て郎黨を養ひ、親愛を以て一族と結び、勢を貯へた後、時節を待つて、惡虐と闘ふ爲である。立て。河内に歸れ。

正行 父上！（思はず父の膝に縋り）では、どうあつても兵庫への御供はなりませんか。

正成（正行の置いた手の上にわが手を置き）そなたをこゝから河内へ歸すのは、戦死にもまさる困難な道を選ばせることぢや。しかし、百獸の王といはれる獅子は、その子を生んで三日を経ると、數千丈の絶壁からこれを谷間へ投げるといふ。そしてその子に猛獸の器があれば、教へずとも跳ね返り、死することはないと。いふ。そなたの小さい肩にこの重い任務を負はせるは、忍びがたきに似たれど、主上の御爲ぢや。そなたは獅子の子の逞しきに生ひ立つてくれ。（突き放す）

やうに 立て。河内に歸れ。

正行 泣き伏す。一同も泣く。この時、男山八幡の森について朝日がうらくとのぼる。

正成（立上がる。）時が移つた。急がう。正房、進軍の用意ぢや。

正房 は。（立つて太鼓の者に指揮す。）

正行 父上。

正成（正行をじつと見下し）大義の重きを忘れるな。（幕）

田邊尙雄
音樂研究家
國學院大學教
授
東京市の人
明治十六年生

二 國歌

田邊尙雄

壹越調旋法
我が國に於け
る音樂の調子
の
林廣守
雅樂師
宮内省雅樂部
長
大阪の人
明治二十九年
歿 年六十六

我が國歌「君が代」の旋律は、國旗日章旗の意匠と共に、世界に對して我が國威を示す標徴であるといつてよい。「君が代」の旋律がすぐれてゐるのは、決して政治的意味によるのではなく、その壹越調旋法なる一種の音階の魔力と、その眞情の流露とによるのである。然らば如何にして、我が國にはかやうに尊嚴なる國歌が生ずるに至つたか。

我が國歌は宮中の雅樂師林廣守の作曲にかゝるものであるが、それよりも以前に、一度外國の備樂師が作

當時
明治十三年頃

曲して、外務省から世界各國へ發表したのであつた。その國歌なるものは、日本語を全く無視した、西洋の讚美歌のやうなもので、我が國の國歌としての精神は全然入つてゐないものであつた。一體、我が國の國歌を外國人に依頼して作つたのであるから、その出來上つたものに日本國民の眞情の流露がないのは當然のことである。そこで國歌の作り換へを行ふことになり、雅樂部の林廣守が選ばれて、古代の雅樂に則つて作つたのが今の「君が代」である。當時我が國は洋樂が輸入されてから間もないことではあつたが、既に洋式の軍樂隊が置かれてゐた。然るに我が國歌がそれ等年少

氣鋭の洋樂家の手にならないで、宮中の雅樂師、しかもその老先輩の手になつたといふことは、一寸異様のやうであるが、それが我が國民にとつて幸福なことであつたのである。

我が上代の音樂は、大和民族の眞情の流露した音樂である。然るに、奈良朝から平安朝の初期へかけては、支那大陸の形式的音樂即ち所謂舞樂が輸入され、大和民族本來の性情を具備した音樂は却つて閉息してゐた。やがて、平安朝の中頃から支那(唐)が亂れて、我が國から留學生を送ることが出来なくなつたので、輸入音樂は勢力を失ひ、輸入音樂と大和民族本來の音樂との

唐

支那の國號

皇紀一二七八

一五六七年

朗詠

雅樂の一種

催馬樂

雅樂の一種

調和が行はれるに至つた。かくして現れた朗詠や催馬樂などの音樂は、大和民族本來の性情を整へるに支那音樂の形式を以てしたもので、こゝに始めて内容、形式の備つた日本音樂の成立を見るに至つたのである。足利時代や江戸時代の日本音樂は著しい發達を遂げてゐるけれども、極めて一方に偏したもので、音樂が單に言語の附屬物となつてしまつた。極端に言へば、音樂は言語の説明に過ぎない有様になつてしまつた。殊に江戸時代の日本音樂は島國的で、大陸に向かつて世界的活動を行はうとする日本にふさはしいものではない。元來大和民族本來の音樂は、大陸的性質を備

久米舞
雅樂の一種
久米歌に附隨
して作られた
樂舞



久米舞 圖

へてみて、決して島國的ではない。かの久米舞の雄大で大陸的なことは驚くほどで、外國の使臣は、宮中の饗宴に於てこの久米舞を見、その結構の雄大に驚歎するといふことである。しかしながら、今日及び將來、我が國が世界に向かつて大いなる發展を遂げようとするに當つて、江戸時代の日本音樂が我等の眞の伴侶ではなく、又世界に誇り得るものでもないと共に、大和民族本來の音樂も、そのまゝではあまりに原始的である。

こゝに大和民族本來の特性を根本とし、それに最もふさはしい形式が與へられたのが所謂雅樂であつて、これを大體保留し傳へてゐたのが宮中の雅樂師であつたのである。その雅樂師の一人が明治の初に國歌「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を備へ、しかも形式に於ても立派なものであるのは當然のことである。

當時の年少氣鋭な洋樂家は、唯西洋音樂を輸入することに汲々として、これを我が國に同化させるまでには至つてゐなかつた。實際、西洋音樂が我が國に同化するやうになり始めたのは日露戰爭以後のことだ、恐

日露戰爭
明治三十七八
年戰役

らくこれが眞の同化を遂げるのは將來のことに屬するであらう。随つて、我が國歌が若し當時の年少氣銳な洋樂家の手に成つてゐたとすれば、恐らく再三再四その改造を行はねばならないやうな羽目に陥つてゐたであらう。然るに事實はこれに反し、宮中の雅樂師の手に成つて、かくの如く世界に誇るべき國歌「君が代」を得たといふことは、國民のこの上もない幸福であつたといはなくてはならない。

(音樂通論)

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學
教授
帝國學士院會
員
福井市の人
昭和二年歿
年六十一

三三 國民のまごころ

芳賀 矢 一

我が國民精神には、太古以來君臣の分が明らかに定まつてゐる。天孫の御血統が即ち皇位を繼ぐべき君で、其餘のものは皆この國土にゐてその下に服従すべき臣と定まつてゐる。皇室は特別な存在であつて、長上であり、神である。「かみ」は神・上・髮に通ずる語で、すべて上にあるものを意味する。今日でも宮中では陛下を「お上」と申し奉るのである。

この「かみ」といふ思想は、太古以來今日に至るまで、我等日本人が皇室に對し奉つて常にもつてゐるところ

であつて、外國臣民の、同族中から成上つた帝王に對する感想とは大差のある點である。

我が國で天皇を「あきつみかみ」又は「あらひとがみ」と申し上げるのは、現在生きてお出でになる神といふ意である。漢字で書けば神と上とは違ふが、國語では區別が無い。大日本帝國憲法第三條に、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とあるのは、よく太古以來の我が國民の心を表したものである。

皇室に對し奉つて敬虔の念を有することはこの通りであるが、たゞ神として恐れ畏むばかりではなく、皇室を公と申し上げる。公はおほやけ大家の義で、皇室に對し奉

つて我々はこやけ小家である。即ち皇室は我等の本家、宗家である。この思想は、皇室と國民との間に、深い親愛の情が籠つてゐることを表してゐる。統治者と被治者といふやうな關係ではなくて、上下互に心の底から親睦してゐる趣である。八百萬の神々は皇孫の事業を翼贊する方々ばかりであるが、それも義理づくに服従して畏れてゐるのではない。大本家の統領として、親分として尊敬してゐるのである。親子關係が成立つてゐるのである。親の命令は子として聽かねばならぬ。親の心は喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられてもうれしい。親子の愛情は人の至情で、これが

眞の「まごころ」である。この「まごころ」が即ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、日本に譯せば「まめごころ」つまり「まごころ」の外はないのである。日本では忠も孝も同じで、どちらも同じく「まごころ」である。

この「まごころ」を以て皇室に對し奉るのが我が國民である。天皇を神として尊び、神として畏れ、親として頼み、親として有難くおもふ。それ故天皇の御命令とあればどんな事にも服し、どんな事にも従ふ。いやいやするのではなく、有難がつてするのである。土地返上などは愚かなこと、身命をも喜んで差出すのである。

海行かばの歌
萬葉集にある
大伴家持の長
歌の一節

海行かば みづく屍 山行かば 草む
す屍 大皇の へにこそ死なめ かへ
りみはせじ

天地正大の氣
藤田東湖の和
文天祥正氣歌
の起句
敷島の云々
敷島の大和心
を人とはば朝
日に匂ふ山櫻
花
(本居宣長)

といふ奉公の精神は即ちこゝに生ずるのである。「天地正大の氣粹然として神州に鍾る」といふ、その正大の氣も、また「敷島の大和心を人とはば」といふその大和心も、皆この「まごころ」をいふのであらう。

この「まごころ」即ち皇室に對する忠の觀念が、武家時代に至つては、轉じて主従關係の連鎖となり、武士道の精髓となつた。自分の仕へる主君には「まごころ」を盡くし、事ある時はその馬前に討死するのが家來たるも

のの道となつたのである。

更にこの精神はいつしか武士といはず、町人といはず、男といはず、女といはず、一般國民の間に廣がつてしまつた。奉公といふことは元來朝廷に仕へ奉ることであつたが、通常の家の雇人にも奉公人といふ語を用ゐるやうになつた。そして町人・百姓の間にも義理が重んぜられ、遊食の徒の間にも、親方・親分に對する犠牲的精神が維持せられてをつた。その本を正せば、君臣の關係が主従の關係に移された結果である。

併し、主従の關係はもとく、君臣の關係を借りて移したのであるから、公方様に對しても、殿様に對しても、

それを特別な存在とは考へなかつた。神とは考へなかつた。どうしても、權力なり、恩義なりの爲に服従するといふ考は失はれなかつた。

随つて、武家の世でも、公方様の天下でも、國民は決して其の上に天子様のいらせられることを忘れたことがない。

かくして一旦主従の關係にまで移された忠の意義は、明治維新とともに再び皇室に對し奉るものと限定せられるに至つた。否、明治維新そのものは、忠義を皇室に限るものとした結果、幕府が倒れたものに外ならない。維新後は士・農・工・商は皆平等になり、陪臣・陪々臣

の制度は廢せられて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しい間武家で養成した武士道的精神は、今や天朝に向かつてのみ捧げられることになつた。武士町人にも行渡り、小説淨瑠璃の平民文學にも反映してゐるこの國民思想は、その犠牲的精神を以て、國家の爲に身命を抛つ機會を見出したのである。

日露戰爭の當初には、何故に日本兵が強いかといふことは、西洋人間の疑問であつた。米を食ふから強いつもいひ、水を飲むから強いつもいひ、中には、日本兵は梅干を入れて國旗の形にした米の握飯を食つて士氣を鼓舞してゐるのだといふ人もあつた。このやうな

物質的原因を以て強兵の實を擧げ得る筈がない。これは一に太古以來の皇室に對する「まごころ」の表徴に外ならぬのである。唯この「まごころ」がこの國體を輝かし、この國を世界に於ける一大強國たらしめたのである。

(國民性十論)

國語卷二終

(覆木製本) 2/4

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月十三日訂正再版
昭和十二年八月八日訂正再版發行

國語 全十卷
定價各冊金五拾五錢

版權所有



編輯者 岩波編輯部

代表者 岩波茂雄

發行者 岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

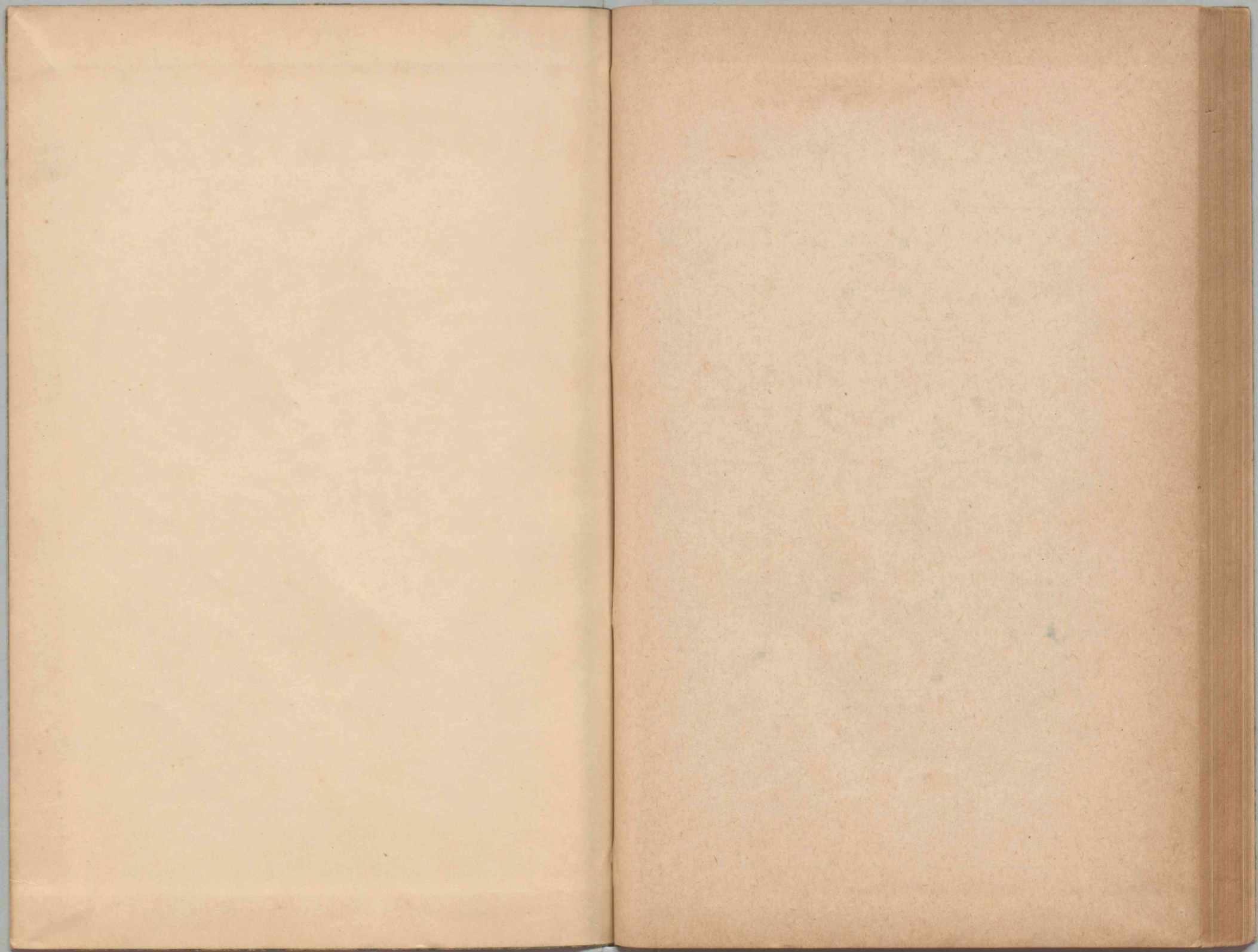
精興社印刷

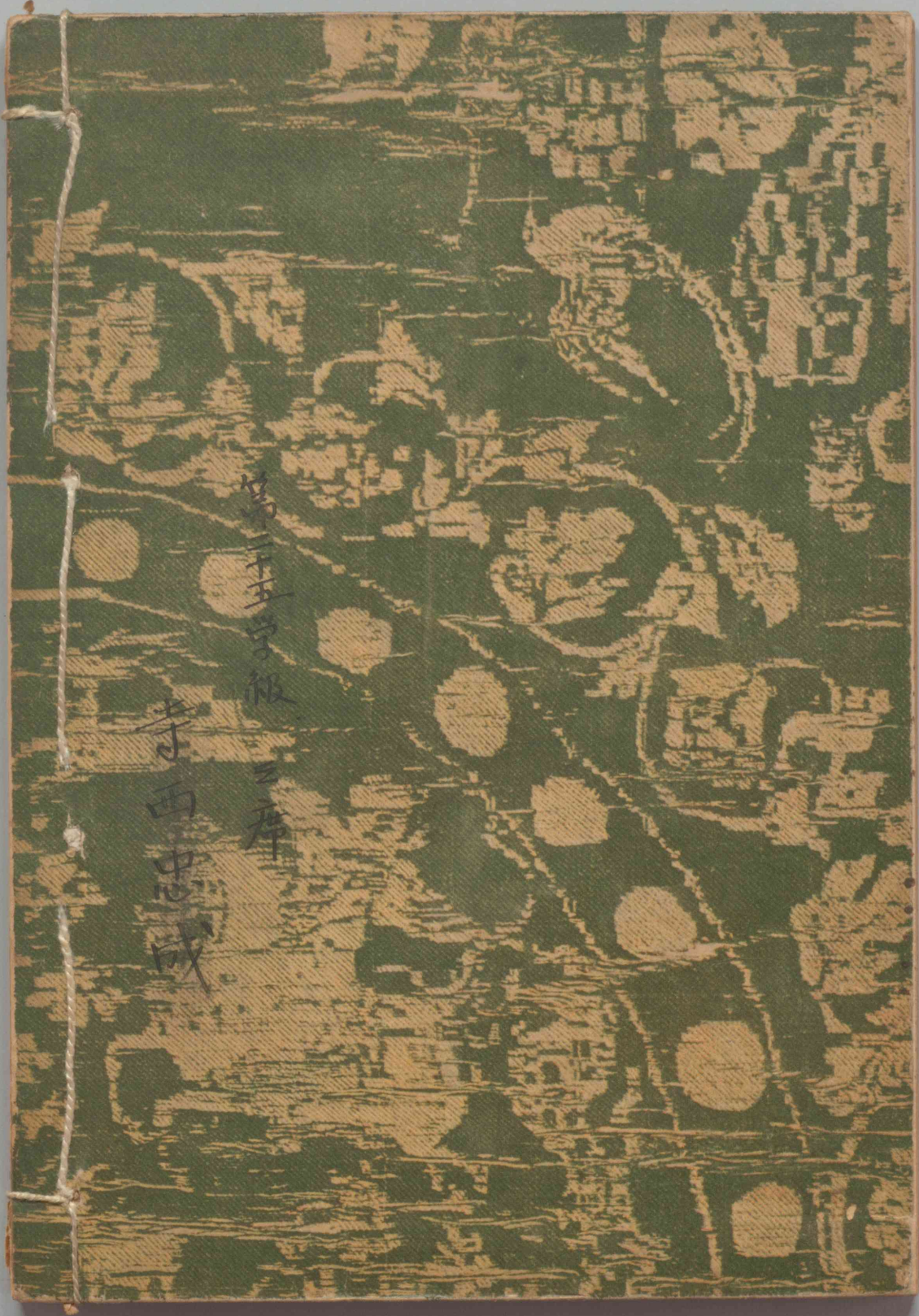
發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段一八七・一八八番
振替口座東京二六二四〇番





第五卷
寺西忠成